

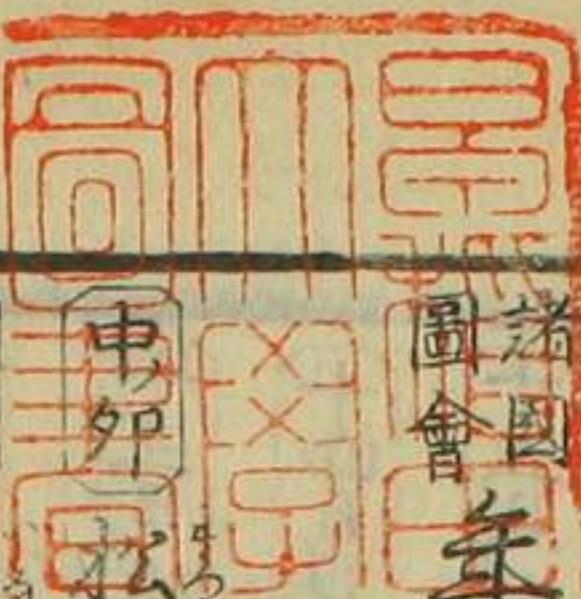


門 36  
流 3382  
卷 3

諸圖會

年中行事大成卷二之下

三月之初日祿



申外 松尾水津出 未 三尾的神索 追江 水尾的神索 追江

中午

稻荷祭津出 未

酉日

石清水除時祭 未 詣訪御神索 信法

朔日

泉涌寺舍利國帳 未

二日

永觀堂奉手開帳 未

三日

上巳

奉州餅

賀辰神夏 未

七條渠落祭 未

平野熊野祭 未

度津祭 未

桃柳薺 未

潮干 大坂

観石瓦 未

冥帳參 未

法國

天王寺經佐書 大坂

鬪雞 未

曲水宴

放夏

松ヶ崎祭 未

八劍祭 未

初詣千羽絆 大坂

糞津祭 未

追江

糞津祭 未

追江

行坐禮儀舉 未

中華大學圖書館  
購 未

四日出替

本大坂

五日七里糸

末

東大寺華嚴塔

大坂

七日泉涌山忌

末

八日佐吉大嘗會

大坂

九日水尾糸

末

十日山傍天王糸

末

十一日神童寺糸

末

十二日上沛靈土く神樂

末

柱髮堂僧度會

末

比叡山札所清

末

十三日後白河院御忌

末

法輪寺十三條

末

十四日祇園法樂社

末

壬生大念佛

末

十五日奉國寺立像教辯願懺

末

十六日除糞元政忌

末

十七日行園忌

末

十八日濟草糸

末

十九日淨光身拭

末

二十日東寺御新供

末

合併大作願懺

末

二十一日西光院御新供

末

松木義經糸

末

廿二日二之瀬糸

末

廿三日大原指

丹波

廿五日蓮如忌

末

天王寺今宮神拜

大坂

般若寺文殊會

大坂

般若寺文殊會

大坂

先帝會

長門

源誠大念佛

末

花旗糸

及直

茶筌の宿勝會

大和

野田御坊討死御書

大坂

七宮糸

松浦

高雄法華會

末

安良日糸

末

離宮八幡神樂

末

雙林寺墨直

末

松尾社立く神樂

末

脣越忌

末

修院蓮如入忌

京

淨瑠璃寺會式

末

諸國  
圖會

年中行事大成卷之二下

三月之部

節

國

中卯

禮記月令云是月也桐始華田鼠化鷦鷯

又云是月也生氣方小盛陽氣發泄向者畢小出前者盡還生以內外也又云婦女之規也母之使也

以之蠶本祓禊之云已上取要

四月酉日巳上娶妻其嫁下之子也

中卯

松尾祭沖出 神傳四月酉日の祭下に祀也

其式今日神輿七基を出であり桂河と浚市ありく西七条御旅而

小神幸かく奉行今日より七月日より月御旅前小於て御あ

神護景雲三年三月十四日湖水より出現

黑尾其古跡を大波止と云社傳云神羅明神

鎮座の年記不詳

○大津二尾明神祭 江別二井寺の鎮守五社の内其一なり南院

緒谷みあり神輿三基祭神赤尾 千神と云社傳云白尾 大寶年中出現

天照太神

○水尾明神祭 江別高鴻郡水尾村みあり祭神二座 猿田彦命

天鉢女命

○稻荷祭沖出 其式今朝社司神祇伯奉至り勅裁の倫旨と信

ありて奉社奉之と午刻神供は時五座の神輿と信

節

中卯

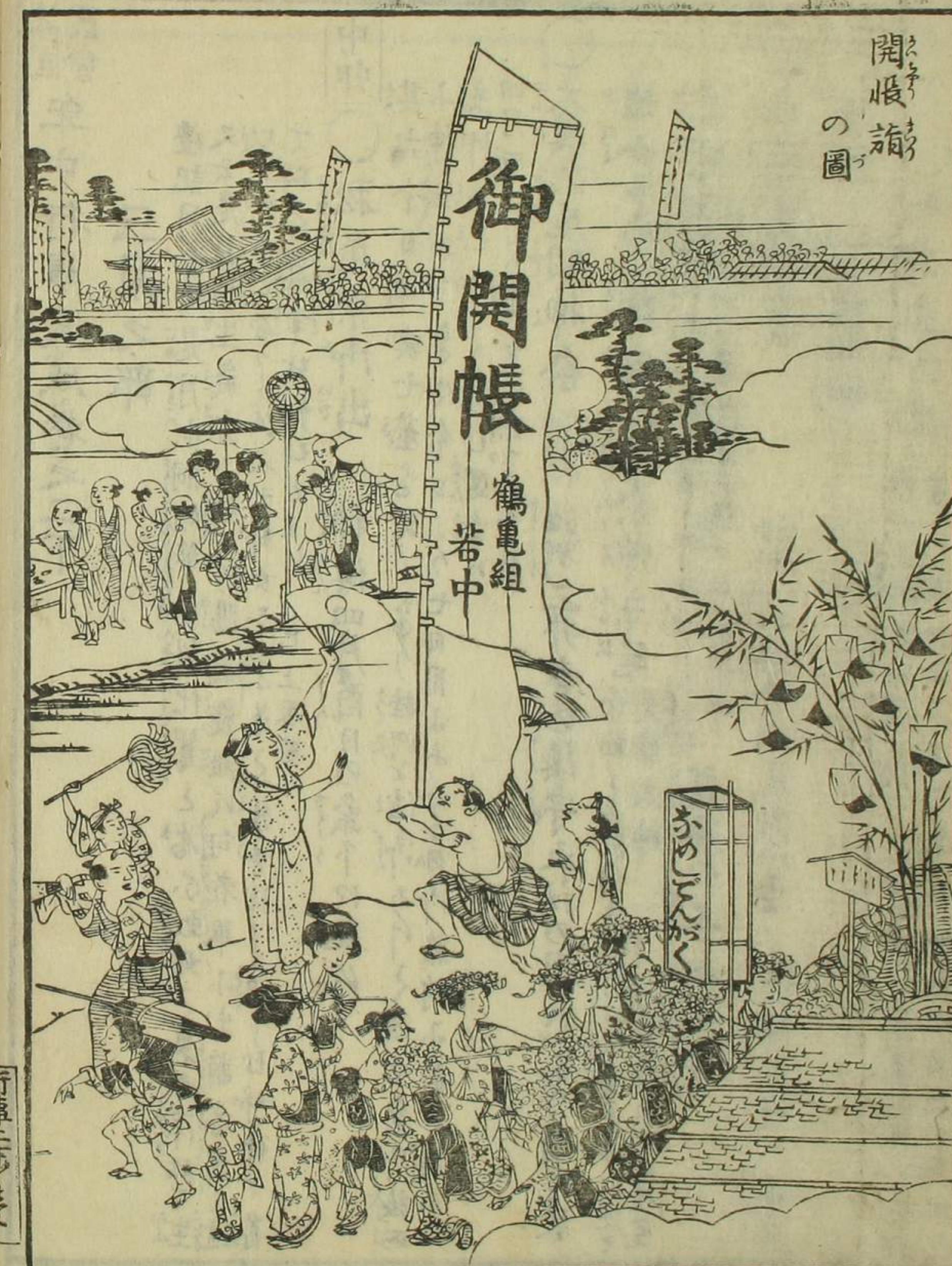
○稻荷祭沖出

其式今朝社司神祇伯奉至り勅裁の倫旨と信

と

- 廿六日 相國寺常徳院殿忌 未  
廿七日 赤山祭 未  
廿八日 由王神代 近江  
上旬 仙臺馬市 陸奥 順入峯 大和  
元候 圓魔堂大念佛 未  
景物 梅花  
藤の花  
吉登會式 大和  
躑躅花  
棣棠花

目録



京師

西日

神連食より昇出にて神前小垂より社司祝詞ありと神事を各神輿ふ酒ひ  
田中、社の神輿より假面を袋奉持めて三神を飾る。其面  
細いをもて法事大師自ら取引てて是故名納しと是神輿奉持する。其面  
神幸の儀あり五座の神輿各敷地の五箇村うち御前堂寺村西九条村東寺村以上の中條小治村中堂む村と歎祝ふはも  
敷地の生民供奉まにて序旅所ふりま弘其道布ら伏見街に之  
七條通をゑへ極ゆをあへ九条の序旅所小治が七条から川の涯み神社あり  
燒く明坂今日神輿ひ跡を渡津の時社より森の河至り御太距火と  
伏見御道あへ幸官小治が神連より旅所小治はまくて四月廿卯日小  
神連文小還せゆ其間法人亲詔縣吏く神輿の轍走るなり或も見えその  
放逐の身と並へ家店拂戸小へ御客を伊豆て碎石を勧先駆ひ云ふ  
は堵る右へ芝守長者宅地が衆とぞ今旅所の神主を  
田中氏生民を掌り四月卯日の衆下に奉くもすを

半將門札

起ふ平將門乱逐の報祭賽あり使播磨守源光明朝臣舞人十人歌云  
新うれ八幡のえやれ石清水ねくも東遠く行うすん 天祐二年三月  
八日除時の衆其以後年毎ふく神とゑうとまく公事根源云先申辰日  
試樂あて舞人行基のゆき坐竹枝を拂ふ 仁寿殿のゆきうら山

手はくうて 陪從迎賓のる人求ふうたひ音樂  
があるをうどもあとやとを  
詠川波三百首  
舟とこふされ接小鳥鳴人のがよし此花をくくへそせよすか

諏訪明神祭 信濃國諏訪郡小车より上諏訪下諏訪の両社あり其間約  
三里 上諏訪へ社領千石祭神健御名刀命 大己貴命の御子ト  
神下照姫命 捻術名刀命の御姫 から天孫降臨の時健御名刀命天孫の令に逢ひ  
て從じて小松と經津主神波神がててこの神を遙くむ健御名刀命逃く  
信濃國諏訪郡小豆く降を乞ふ云請く諏訪郡をゆづく大己貴の遣りと  
して我有とせば則天孫の令下に達ドトシカリよつて經津主神大孫小豆まで  
それを免とは是今之諏訪大明神あり坂上田村庵を惡徒退治の祈願小豆そ  
れを禮送れ

ま  
式は月酉日二ツあれを初の酉日を用ひニツあまび中の酉日とりつゝゑ日とて前  
官十間廊小ちいて猪炙あり猪の魚も及び鹿の頭七十立を組小のせ神おもて  
ふ供ふ其中に必び耳の刻る鹿の頭あり是例事遠く一奇矣又  
野よ麻の肉を料り盛くら被を付へ世人も其麻の肉を食と他人も人  
のゆく所得く麻肉を料りそ麻を遊綱の猪附或も祈祝の者よりこきと  
猪ぐ何方よりを納むる更と極めある所へあるざれども其擣集る更七十立足り

極り恒例一つも場減ふ一是も亦一齊吳ガリ下の涵涼の象より麻と供へ代  
往きとも社人より庶食のゆう一と如く上の宿泊年中七十度の新  
あり其寄りる祭祀も計くは書中に出れど之とも其妻へ後編小記を  
因共上宿泊月七の不思議あり所謂當時の廟の頭恒例たぐひて廟の新是ハ  
善賢堂の板壁小室あり其定よ紙をあて日小うせバトの宿泊の三重の塔の新  
其紙小移ふ上宿泊月の宿泊其同と陽川支三里なりの社壇の雨是年中  
已卯茅葺の寶殿の施す御事あつて是年早天候とひども遠くは  
小天孫井と云ふあり遠州天孫川の水深きと云根入松是ら根八方へ善  
ふ幸幡龍のめぐ。温泉是の湯の山より高き所の内とぬテげばは所の湯止  
ガリの木の檜是も各被訪の湖水物寫く平地とかう時こゝろとて御本  
て其上をつる其後人馬もに水のうを伴本にまし小立く入孤渡より人  
馬の往來止む富士山湖南水後は是も湖上より士ひの新移不なり宿泊の  
時湖水うちは二日三夜みなし神上の宮の棲もり下の宮の宿小みそろは  
佑久郡新海の神と會合しゆくあり其水季と幸樹尺からんべく陣す  
去て魚鱗の如くすく渡沖の沿道のとく小見へく水くばは場所と以く  
明年的右凶体トヒキの夏なり付古も將軍家へ跡を引キアラ夏より  
一ヶ今ち吏を書記して郡主へ上手かり。其ニ云元旦怪狩支と西月  
え日の承下小記。其ニ云五穀筒彌支は正月十四日の承下小記。其四  
云鹿の耳割是今日の式。其五云仲假田支と六月廿日の承下小記。  
其六云尊井社清池支と十二月廿日の承下小記。其七云宝殿の雨前後出  
て

朔日

○泉涌寺舍利園帳辰刻申刻二時がる是日より八日迄  
永親堂顧問像園帳

洛東栗岡山の北小あり聖衆来迎山禪林寺中

京師

二日

○上巳

又桃の節供も又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立  
日あり是を五節供と云不禮正月元日二月三日五月五日又正月元日と除く

大坂

三日

○四天王寺經供養

聖靈院の白砂小旅執行あり未の下別聖應老子の  
像と安置する輩小立而の下賛小立

節供

四天王寺經供養

西の小出より衆僧諸役人着坐總礼圓向あり又樂人樂隊奉行と

御の下の舞と云其の式も涅槃會奉行ト

大坂

五日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

六日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

七日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

八日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

九日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

十日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

十一日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

十二日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

十三日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

十四日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

十五日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

十六日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

十七日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

十八日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

十九日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

二十日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

廿一日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

廿二日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

廿三日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

廿四日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

廿五日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

廿六日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

廿七日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

廿八日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

廿九日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

京師

三十日

○上巳

又桃の節供今日戒俗小節と称す凡佳良と称す日年中小立

大坂

廿九日

近年と後羅錦繡をもてく制一たる其衣裳離せばく又御殿隨身橋櫻の造りを考へ小き調度をうべ饗應とは是男女を幸福有んて欣祝をうなづか枕筆矣云こそひきものゝもてく葵ふ

つかあそびの調度と云接する先代旧事記云敏達天皇二年正月侍從離像と勃す太子聖德親王體の形を取り其男の像女のが像をうち内儀外儀を定男女の別と見しと被をえと位を下先室の被を以て遊と諸童小与は遊大人の遊小相を向媛幼女の遊とせよと云ふれを雅名の盤鷺久遠にして上右脇小之經あり禮記内則云女子十年不出姆媿媿廳足麻枲と孰と絲繭を治先紗を織と糸を組む女奉と學まで以て衣服と共に神祀を親く酒漿邊豆菹醯と納く禮とり奠を相助とと教うとく是故りて云わば古ノ明王の教をなき乎支和漢吳蜀奉左子のは遊とあらやも幼女以導すれ禮容を習りめん拘小設をゆ限ニ

は日汀水祓を取一病苦を除くと云源氏物語よ源氏の君須ナヘトノの

時は浦意生て私よ木偶張立ひ上已の祓いゆよ拂書あり穀らく亭を今の大祓と云ふと古ノの祓の具あるんと後考あれべ

百首

あれとも立て桃の花まく上の巳日と詣定め舞

慈惠

奉神解

旧夏記

云今日神の解と三輪大昭神三神罟八神殿小事

と云く是と離の食と云

良賤の鬼女子蓬の解と云

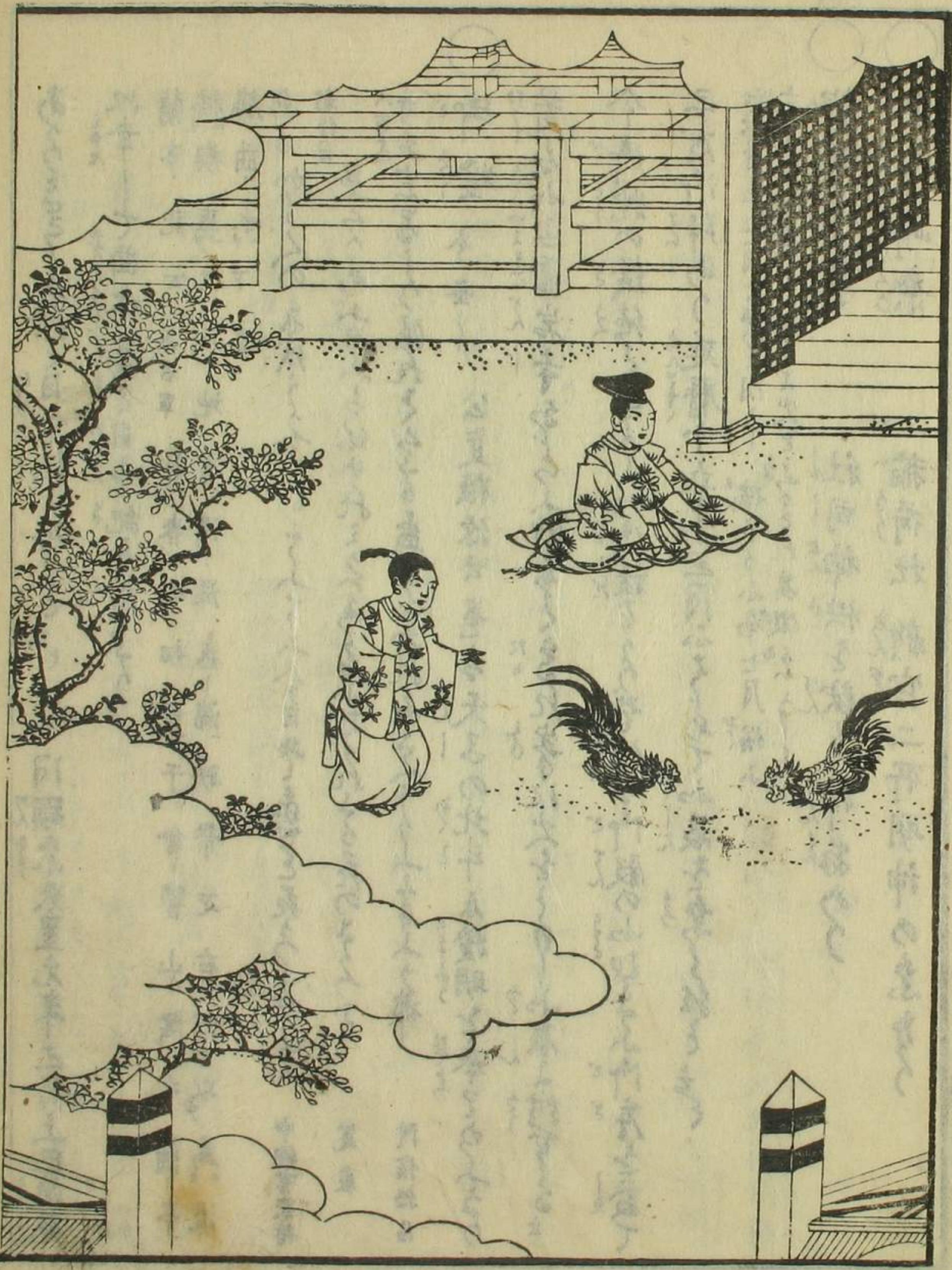
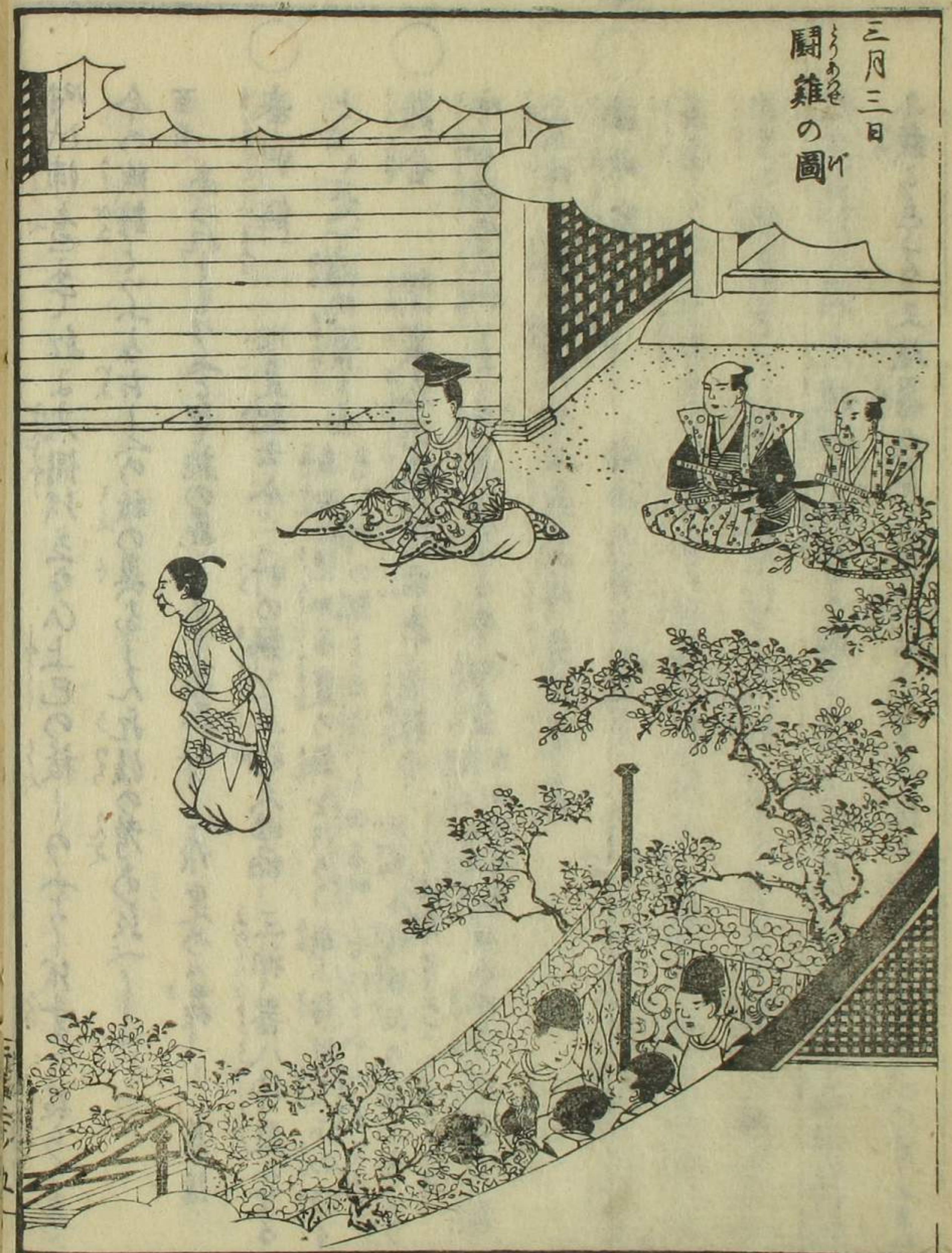
と云く解と云

良賤の鬼女子蓬の解と云

と云く解と

三月三日

鬪雞の圖



ありとてめぐれと日幸紀よりと云

日顯宗天皇元年二月上巳後苑

に幸して曲水宴と日幸紀奉見くと

蘭亭記云王右軍暮春之初會于會稽山陰之蘭亭

修禊事也此地有清流急湍映帶左右引以爲流觴曲水下畧

新古かゝ人の余休うつくあそびて今日本日をあせと花うへせよ中納言家持  
新續古失うあふるもはせええあをかかれある花のさうど定家

六百石奇合岩るも流れくする盈よもあれ色そくすまよく那

隆信院

御燈今每公夏根源云是も天子の北斗小燈明と奉てゆきり  
昔も小山靈岩寺から所もくるん寺に火をとり小夜よ供むる

今佛燈の儀徳くげうの佛燈もくらぎはる佛殿の小夜よ供むる三

度佛拜あり延暦十五年三月ふもとめて小夜を奠て

大文字と号しゆくよ火とよすこれ其燭火うるる

社司神供を歎ト神翁あり

西松ヶ崎祭箱荷社新宮二所明神の東方あり

野中村八劔明神の東あり

糸神少彦名命神輿一基あり

黄檗山お僊之隱元禪師字も隆琦原大明福州福

普門寺の龍溪和尚師の法徳を慕ひ朝外奏して揚州小迎し後水尾帝

時く師を宮中に召せ法同ありて德山入門の御製良の和句を賜て寛文十三

年台命がりて山州太和田莊小神利と創建して黄檗山萬福寺と號せ

延宝元年二月三日寂し帝特乎大光並照國師の号賜ふ

天王寺太子堂經供養衆僧勸之已刻音樂あり

熊野三所權現祭攝津國平野をもつ寺僧法會あり

壺井祭河内國古市郡をもつ糸神八幡宮源賴義義家

父子奥州朝敵退治の時官軍渴小乃ふ頼義遙不帝都の方を向ひ石清水八幡

宮を祈念一碑を立て傷の寝處と穿ぬる忽湯泉涌出一諸軍唱を聞て勝

りのちまんつや  
利の後靈泉と靈小瀧之上流には所す井と呼ぶ  
よしやうい

神樂式神人  
持げ辯弓  
木とねて縁石を渡れ

持<sup>ゲ</sup>洋<sup>ヨ</sup>弓<sup>ム</sup>木<sup>キ</sup>とおて<sup>テ</sup>縄<sup>ヨ</sup>あ<sup>ム</sup>渡<sup>ル</sup>  
初<sup>ハ</sup>瀬<sup>セ</sup>寺<sup>ト</sup>千<sup>チ</sup>部<sup>ム</sup>經<sup>ヌシ</sup> 今日<sup>ヒ</sup>より  
十一日<sup>イレ</sup>大<sup>ハ</sup>和<sup>ハ</sup>國<sup>クニ</sup>城<sup>シ</sup>上<sup>ウエ</sup>郡<sup>クニ</sup>小<sup>コ</sup>有<sup>アリ</sup>

十一日未正ノ刻に起立  
紀伊國名草郡牧田小あり  
祭神少彦名命

栗島祭

已貴命少彦名命

頭風かみふうを蒸生あまやおき及び畜産けいさんのなめら其病そのびょうひと療りようふの方ほうを定め又鳥獸昆虫とうじゆ昆蟲乃の

わざりひ　あ  
灾異を擧人あふ其神厭乃法を定む是を教く百姓今事多く咸恩頼とる  
まくまゆる　うむ

其後お産名命行く鈴野の御崎ふまく遙か常母郷小通又云淡島よせて

栗莖小綠一六則彈波て常世卿小至雨一きと

栗鳴の妻の歯を剥先  
十六歳の妻三月三日歯を剥先  
妻の歯を剥先

佐吉の神小娘とは時紀の御宿うち櫻の住右浦千浮と申す神女と  
云ふ通り今に立く今日湖干の半島の上に其鬱を除ゆる狹霧の石に畫

今社内ふありされどもは神ニ独の病あらが在候おの外是と遡去又  
ゆえ神女支婦の道障あるを欲き承代を作りて支婦の道を蒙ひ

たまふ今 鳥糞を起る所 うは  
の 今 おのれの婦 女子を離すと  
前 おのれの婦 女の病を離さぬ  
の うは由縁ありて

廣峯祭 播磨國飾磨郡津守より  
素盞烏尊

稻田姫 八王子 傳云聖武天皇天平五年二月十八日吉備真備人

帰朝の時挾列ゆゑく素盞烏尊老翁と現じて達ゆ故ふ吉備帝に奏して

社を建宗不<sup>トモ</sup>うり二十二社注式云牛頭天王初免播列廣峯山<sup>モードヤマ</sup>跡<sup>モトツカニ</sup>陽成院<sup>ヨウジンイエン</sup>有

御宇うきよか白川東光寺ひがしひかりの僧そう小移こいりへ貞親奉中まつちんハ坂郷さかたみ移いり歎たんと云いふ

案記 今日乃び十八日丙午日壬戌とて近國姫路庚子勧  
進十八日走馬丙午社宿廿多處名夜宿小豆郡と行  
くに遡水の農家幸甚

敵と折ふふ是猶可りとて皆人群をされ  
其十八日よりあへ點跡の日たりとせ

大物神 祈色村  
小身の辺津尾八幡宮 國分村  
三社の系だら

其玄廟曰都宮八幡の両神裏  
三十八年の御飯小屋と衆徒法事を繫  
三月酉仲奥波音と御飯小屋と衆徒法事を繫  
其玄廟曰都宮八幡の両神裏  
三十八年の御飯小屋と衆徒法事を繫

二日酉神連波瀬三十八私のお友小林と衆徒法乐を幣あら慈く

神輿墨韋あり  
邊山幽靈賀郡鳥居布靈祠栗神大友室子  
あらわのまことし あらは山門村小太郎



衆神比良貴天王

神樂一村又一基 完あう

衆神古へ族所の池うりにて園の中 小竹を走り 銚子を引く 繩子と  
縛る荒一模様小渡停あるなり先一木寺 豊樂の二基を舉く  
社を出るは時教里の神輿道を取れ内に 繩所小渡停ありあ  
とも竹の先は色紙を切付く三社を確年と称へ鬼 帝等先ふ  
さんやれくと御ひを鼓絃本合しれども難に神輿を昇らるゝの  
日ぞくうれを御よさんやまとつてあやまやつす言の情じなる威  
風すが神樂を出し族所小於く神供の支あ  
修善寺衆神賀頭天王 神樂一基竹の頭小扇ニ半と付く板驅も又  
小原村衆神姬宮明神 山端村衆神 騎馬あり騎者起紙の裝本と云ひ多あれあ  
高野村衆神早良親王 神樂一基布洋と竹と十文字宝函繩子と云ひ多あれあ  
供持女姓如子是と戴き族所小延て神位を被る  
神人足拵と足し駒馬より位をねり 騎馬あり亦よ

暖誠大念佛

十五日まで 清涼寺釈迦堂坐て法會あう又半の別土人堂

内の舞臺坐て能優をあた後宇多院弘安二年 うづ姫教管見記云姫  
去三年二月七日清涼寺大念佛廿日うづ姫教管見記云姫  
絶流みて諸人の愛好せんが爲とせ圓覺上人狂言念佛の是相を

母ふある豆うら起るより今れ里の壹山念佛會不集うてやうそと云  
も是うら起る豆 ねむかん ねむかん 十一日十二日十八日の二十九日也

其式今日うる十五日まで寺僧嘗めよ様く大念佛会と拂ひ其佛  
金輪をすき度小い、こ夕と嘗め候沙汰ホウシヤウマくと帽人是小  
被衣被合に里俗云ハ、こ夕と之ふは未だ上人ぬよまるうつよと我  
國え上人の豆古十四日の象下にちよに拂すふ、こ夕と南無阿彌陀  
の拂トなるもの力人ボウシヤウマく其由縁と云うべし十一日十二日  
十五日の二十九日と念佛會畢く燭燈面を被る者中舞臺幕ふねて  
能優をかん其状生の能優小日ト能優少里童等其用引ふの  
面被可と戲流をすく村中と歩けりく母俗云壬生の能優の  
桶千の能盗人と其箇前より之ふ其由縁と云うべし十一日十二日  
人御歎する体と云。假迄三葉の苗千の西小張あり尾が港と云  
内裏中裏廢の時拂内裏女童は他水漬けぬりとて水と  
波一隻あり或老人其女小羽城ノ夫を其頭冠云ふ御りくと云ふ  
つう又念佛去ふ金輪を拂すの頭より白本絣の大き帽子を被る  
名ばずてはうら帽子と云。御小羽城のあくへはうら帽子  
哉キヤンと云くやうううが面白いと驚くもは能優の事と云ふ  
續古今  
わかれぬ痴子人のうはうとして當知能優の事不育的の序 寂蓮

花鎮祭 今毎一 三輪明神とある

先代旧史記云二月十四日大神秋祭の

神を来て沙度と稱ふ太國主大神其妃海童姬大神寔神と主領うる易常  
神を来て沙度と稱ふ太國主大神其妃海童姬大神寔神と主領うる易常

大神の系宗宮小比<sup>ハシ</sup>は時國社小比<sup>ハシ</sup>行品の卑と以あつて右更記云疫  
病多く起る大物主大神沛夢<sup>カタマ</sup>引れく云是も我之御心故以意富多<sup>カタマ</sup>泥古  
而令祭我御前<sup>ハシ</sup>者神氣不起國安平云<sup>ハシ</sup>荒魂<sup>カタマ</sup>林<sup>カタマ</sup>和鬼<sup>カタマ</sup>林<sup>カタマ</sup>大已貴<sup>カタマ</sup>  
の社と謂<sup>ハシ</sup>たも大物主<sup>ハシ</sup>ト<sup>ハシ</sup>公支根源云是も大神<sup>ハシ</sup>枝井<sup>ハシ</sup>のニ<sup>ハシ</sup>と云  
也神祇令奉哉<sup>ハシ</sup>春花<sup>カタマ</sup>祀<sup>ハシ</sup>頃<sup>ハシ</sup>疫神<sup>カタマ</sup>を教<sup>ハシ</sup>て人をも安むる有<sup>ハシ</sup>  
れをもはん為<sup>ハシ</sup>小比<sup>ハシ</sup>祭<sup>ハシ</sup>育<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>や神祇<sup>カタマ</sup>生<sup>ハシ</sup>行<sup>ハシ</sup>花<sup>カタマ</sup>病<sup>カタマ</sup>して三<sup>ハシ</sup>勝<sup>ハシ</sup>  
大國<sup>カタマ</sup>谷<sup>カタマ</sup>明神<sup>カタマ</sup>底座<sup>カタマ</sup>の前<sup>ハシ</sup>有<sup>ハシ</sup>後<sup>ハシ</sup>安坐<sup>カタマ</sup>大神<sup>カタマ</sup>荒鬼<sup>カタマ</sup>神<sup>カタマ</sup>秋<sup>カタマ</sup>ニ<sup>ハシ</sup>勝<sup>ハシ</sup>社<sup>カタマ</sup>  
小枝<sup>カタマ</sup>井川<sup>カタマ</sup>の南<sup>ハシ</sup>有<sup>ハシ</sup>今<sup>ハシ</sup>花<sup>カタマ</sup>微<sup>カタマ</sup>と称<sup>ハシ</sup>神名慢<sup>カタマ</sup>奉<sup>ハシ</sup>出<sup>ハシ</sup>  
○藥師寺<sup>カタマ</sup>寂勝會<sup>カタマ</sup> 南都西の京<sup>カタマ</sup>藥師寺<sup>カタマ</sup>小於<sup>ハシ</sup>今日<sup>ハシ</sup>十二日<sup>ハシ</sup>七<sup>ハシ</sup>日  
の法會<sup>カタマ</sup>有<sup>ハシ</sup>國史云天長<sup>カタマ</sup>七年八月始藥師寺每年寂勝王經會<sup>カタマ</sup>役<sup>ハシ</sup>く  
此寺清見原天皇皇后<sup>カタマ</sup>の為<sup>ハシ</sup>小建<sup>カタマ</sup>ふ<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>大<sup>ハシ</sup>將<sup>ハシ</sup>信<sup>ハシ</sup>仲繼<sup>カタマ</sup>律師<sup>カタマ</sup>の  
申<sup>ハシ</sup>小<sup>ハシ</sup>御<sup>ハシ</sup>く<sup>ハシ</sup>社<sup>カタマ</sup>を始源氏<sup>カタマ</sup>君<sup>カタマ</sup>と<sup>ハシ</sup>民人<sup>カタマ</sup>これを<sup>ハシ</sup>り<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>く  
○東大寺<sup>カタマ</sup>華嚴會<sup>カタマ</sup> 聖武天皇の濟願<sup>カタマ</sup>て天平勝寶<sup>カタマ</sup>之年<sup>ハシ</sup>建<sup>ハシ</sup>キ<sup>ハシ</sup>  
金銅<sup>カタマ</sup>の釋迦佛<sup>カタマ</sup> 有<sup>ハシ</sup>世<sup>カタマ</sup>南<sup>カタマ</sup>都<sup>カタマ</sup>の大佛<sup>カタマ</sup>と<sup>ハシ</sup>

佛<sup>カタマ</sup>五丈三尺立<sup>ハシ</sup>す

## 七日

○泉涌寺<sup>カタマ</sup>圓山忌<sup>カタマ</sup> 富寺<sup>カタマ</sup>弘法大師<sup>カタマ</sup>の圓<sup>カタマ</sup>墓<sup>カタマ</sup>て初法輪寺<sup>カタマ</sup>

之寺<sup>カタマ</sup>と云寺領二千二百四十一石四斗餘<sup>カタマ</sup>  
之入奉<sup>カタマ</sup>度<sup>カタマ</sup>寺<sup>カタマ</sup>の額<sup>カタマ</sup>也南門小<sup>ハシ</sup>れ金光<sup>カタマ</sup>四天王<sup>カタマ</sup>護國<sup>カタマ</sup>之寺<sup>カタマ</sup>の額<sup>カタマ</sup>と<sup>ハシ</sup>  
西大門小<sup>ハシ</sup>れ是弘法大師<sup>カタマ</sup>の筆<sup>カタマ</sup>昔東南院<sup>カタマ</sup>の寺<sup>カタマ</sup>勢一代<sup>カタマ</sup>の門主<sup>カタマ</sup>  
は寺<sup>カタマ</sup>と<sup>ハシ</sup>も二論華嚴<sup>カタマ</sup>を破<sup>ハシ</sup>かんぞ華嚴<sup>カタマ</sup>小限<sup>カタマ</sup>  
登<sup>ハシ</sup>こ<sup>ハシ</sup>て西門南門の額<sup>カタマ</sup>を<sup>ハシ</sup>らざれ<sup>ハシ</sup>と<sup>ハシ</sup>あ<sup>ハシ</sup>敵<sup>カタマ</sup>同寺<sup>カタマ</sup>穀<sup>カタマ</sup>室<sup>カタマ</sup>病<sup>カタマ</sup>  
ありと<sup>ハシ</sup>や<sup>ハシ</sup>

東大寺一<sup>ハシ</sup>大華嚴寺又圓分寺又恒說華嚴寺金光明四天王<sup>カタマ</sup>護國<sup>カタマ</sup>  
之寺<sup>カタマ</sup>と云寺領二千二百四十一石四斗餘<sup>カタマ</sup>  
と號<sup>ハシ</sup>齊衡<sup>カタマ</sup>三年左更<sup>カタマ</sup>續嗣<sup>カタマ</sup>再建<sup>カタマ</sup>ありて天台宗<sup>カタマ</sup>に改<sup>ハシ</sup>て圓<sup>カタマ</sup>遂<sup>カタマ</sup>寺<sup>カタマ</sup>と<sup>ハシ</sup>  
號<sup>ハシ</sup>人<sup>カタマ</sup>山<sup>カタマ</sup>上<sup>カタマ</sup>の<sup>カタマ</sup>上<sup>カタマ</sup>不<sup>カタマ</sup>中無<sup>カタマ</sup>傍<sup>カタマ</sup>律師<sup>カタマ</sup>戒密<sup>カタマ</sup>禪律<sup>カタマ</sup>の<sup>カタマ</sup>宗<sup>カタマ</sup>兼<sup>カタマ</sup>ほ<sup>ハシ</sup>

清泉涌出からび松小泉涌寺と改む

元亨承書云後裔事も不可棄肥後國飽田郡の人母と舊氏棄孤生て鞠  
下に養ひ二日以經く食歟の事乎一母の阿妹社と吉祥の因ふると知り抱き  
歸之母付て乳巻し即に奉にて池邊寺の珍曉不属に童稚ありと之を  
頤老成の量あり七歳より佛書と達三十に紫にて私密をす十八歳にて  
而て薦飾し建久二年に月商紙と附く宋は慶元景福寺の子宏律院小  
律部と号ひ又宗印法師の室に入く天台の教観を仰る高宗國不あつ附  
瑞の更房一建暦元年律宗の經書三百九天台の章疏七百十華嚴章疏  
百七十其餘儒書雜書圓画碑帖墨物等と勢へて帰祖を建保六年和列の  
五卷刺史朝散大夫中信虜仙遊寺以て後裔小あは此時寺と改む嘉祐元年十  
月泉涌寺小於く重閣講堂を建同二年同三月七日右脇すて逝れ年六十二

八日

○住吉大嘗會

攝津國佐古郡小あ

京師

諸國

九日

○水尾祭

山城國高豐郡水尾村小あ

祭神清和天皇

大坂

諸國

○

野田御塲討死御書

攝津國西成郡野田村小於く新之

證如上人の御塲と政先遂小坂まで返り却て是の土民等上人小坂の  
事ありと附て討死する者乎一上人ふくあらわし御文書下さる今日  
これを出一徳む又七月廿八日以降の門徒卒頃ちにありて帝相繼承を用例して  
怒溫和寡言奉勸禮ふ遵て專政事に構へやく

御

御

可有追考

可有追考

十日

○山崎天王參

社勢勒之神宝玉經模劍スガル模劍の在りと立身

社傳四月朔日參下記

京師

諸國



○高雄法華會

除小字於神護寺小於これと行ふ

羅山文集云延暦廿一年正月大學頭和氣朝臣弘世乃其弟内舍人真綱傳教  
大師とて寺を招き法華と辯し又善議勤操等十餘卷於座清して和者とおれ弘  
世真綱と清麻呂の子を是を於て帝治於太浦和氣朝臣入鹿をも以て詔使と  
賜ふ是所謂法華會の初也傳教南華の巻空小於て修練を厚奉教日一の  
猪布く開伽を持あはせと一旦猪谷不滿て聲ふ傳教これを哀と絶と写して  
弔ふおう今不五度毎年三月十日これをおうと立

寺と神護國祚寺と號ひ稱德天皇の御宇八幡宮の神託する光仁天皇乃  
御草創和氣清麻呂造立に天長二年寺を空海弘法小賜よ中興と文覺上人  
山本住して寺と再建を寺領二百石

附録

井蛙抄云文覚上人を西行をにくまれり其故と追々乃身をくび一節小  
佛を摩河の和地奉あるべし般若波羅蜜多經かくこふ嘗とらむく  
余にうき法師ありばくみて見あひまへ頭を折るべきよ／＼乃

あ／＼は事あらめとれども於は毒食小西行ありて死の後もと  
詔ありて名を立て上人ふあせ／＼身のまゝは爲事もとえ  
坊へ歸り小產よやりうんとく人もと人達をもとづくわの西行と  
ヤキのまゝは法華縁のを名ふ事よりてはまよと日くね一巻は傳  
トの御よりうんとてありてはらひは達を上人内めく手もと引くか  
けり事せひうる体もくあり傳子孫ありく傳ゆうもとづく  
是へ給へとて入くお面とて半は承りぬびとて見事よ入ぱりつ  
の事候へりう／＼あくまほよお供して般若と空を應じて空の明帝  
あくまほてゆされまうすみまよと奉拂ふすがふ帰る事候  
思ひとくと人らけ／＼ま焉行ふ見えひくは既あまんとつあ／＼は  
い／＼小付よ心安よあぐらはは／＼半日は作め遠ひとくやられあ  
りうひのほめどりやあまく文覚ふくらんむのぬ乃はゆくまく文覚  
をこそまんざる若されとやこれるけは令をうながすとまく

安良日系

治小今寧小あり

安良日祭  
信小今寧小あり

百練抄云之妻二年四月家中の鬼女風流を備へ鼓笛を調へ鬼聖社奉事は  
サヨコミ所夜須れと号くと云ふ也云今日高雄の法華人鬼勸まば魔障來  
支あつ放小踊辟をもて邪魔を和け法事會の卒姿小畢んあ安乐免  
吉慶をも小黒と謂て云又云春時疫病多く行ふ今官も疫神より  
放小踊躍を作りて神靈を勸免以て疫疾無あるものよりと云  
按どり小神社考云一象院西暦五年長保二年母間諱あくに神社と赤丘ふ志  
山立と帝靈金と云々今日の式其俗風ふるん頃清和天皇貞觀  
十八年疫神ある日良齋家中の男女を引ひく六月七日十四日疫神と  
神龕苑よ送ふ赤本年六月七日小引めくして是と祇園去とつよ  
はゑよ傘祥あう其仲今日の式のやへ雍列府志よ云後小松院應永年  
中天下餓死の者多々諸寺伏して踊躍念佛を禮せ一象院公亮と持  
今千本壬生二月念佛會安樂院神幸又禪院法會の激焉と云  
其式年の初そり南上野村の農民頭赤毛を被り身少へ赤き衲縫と  
著異体の襷をあし襷を被り持者に人目下形ある兜褐被をね鳥帽  
子を着たる者二人太うる絹金の上小衣を拂是をおもめ其下に立川又  
鳥帽子末襷を着せし者數十人これよ徒へ君先一村の魁堂不集え

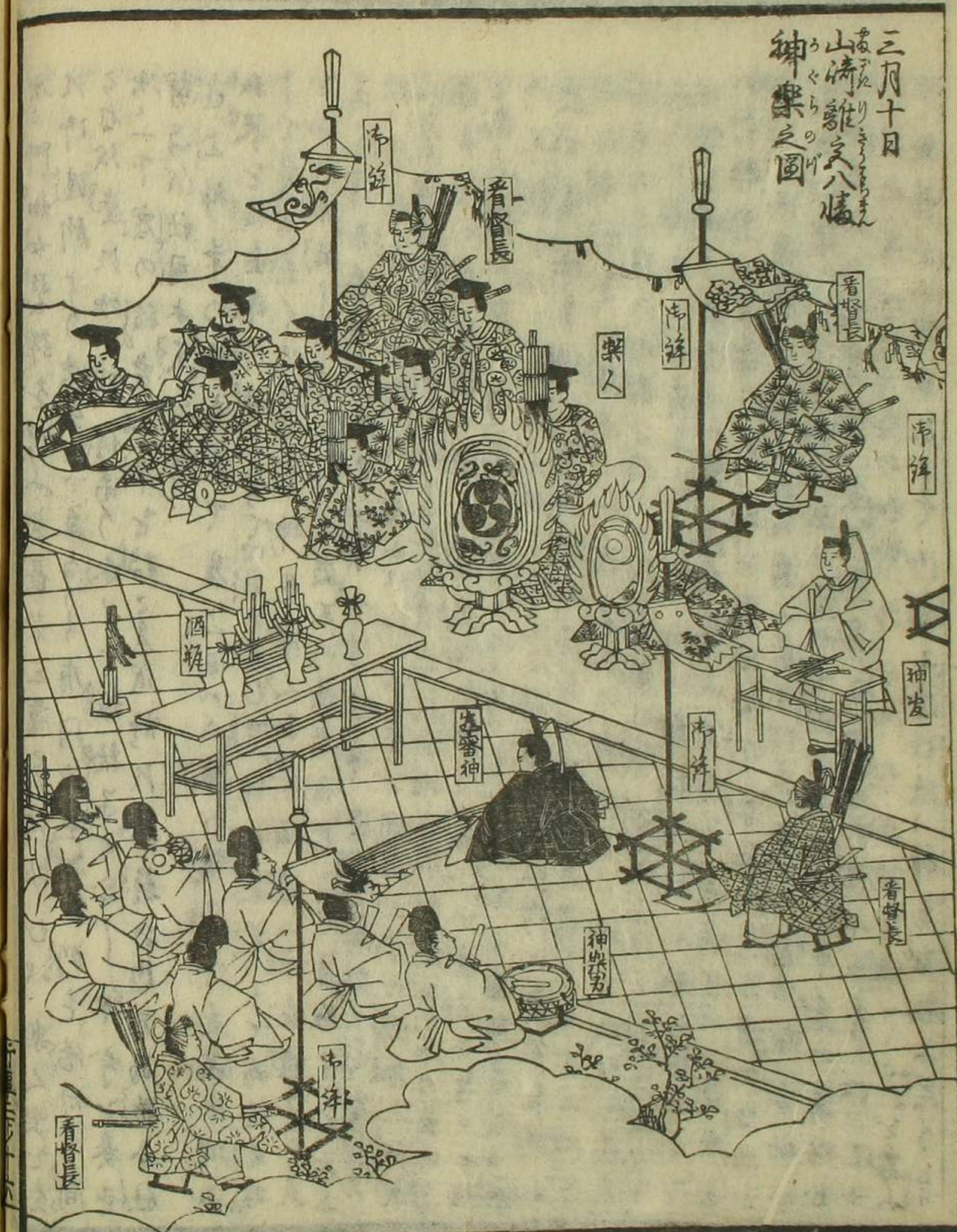
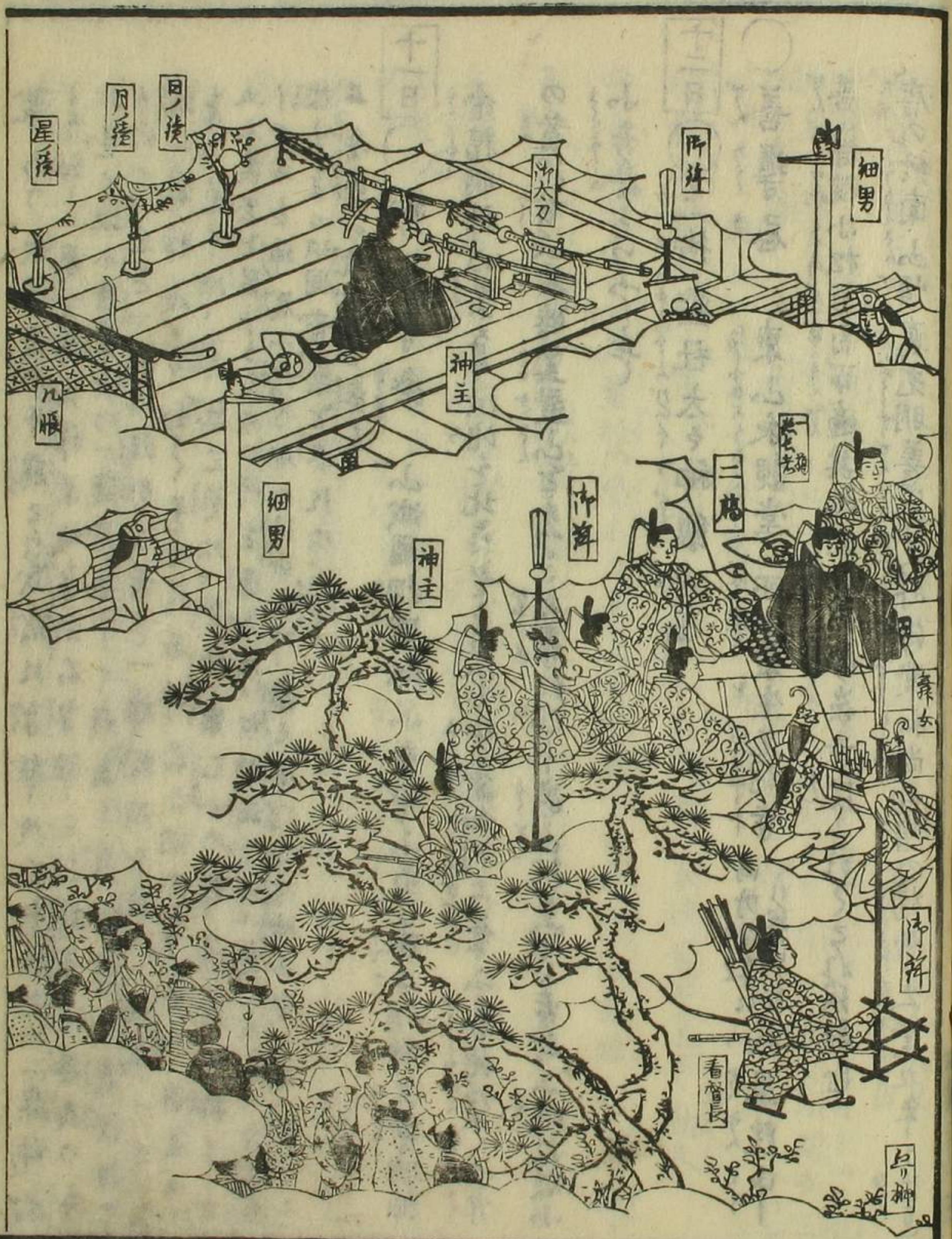
寺の社前より狂歌小安良日花よやもんにさうとあをう  
大源房の社下の御赤の社うち今まよ詫く社前よ於く踊躍をふ  
神乃者もを刀脇指を肩ふしげ扇を宍紀飽文で酒小碎く踊已渴  
度見るも醉ほうと云日赤の神梅ヶ辻村是半村何上村の三ヶ村より  
下村毎よ上聖村の如き形を取く踊躍奇も又等しくて今ま  
禱々踊躍をかゝりて者賀戻小畠又支社勢及び社司の家每  
小於て踊躍となに刻は所の其家主肩夜を脱くこままで是を朝  
とくと踊躍がよし毛経頭の纏衣冠其兜の履物の外履を取るも朝  
またよく渡宿を除くと云佛へ  
今日土人の難小洞へ所の唱哥と寂蓮が作りて右年今え神主の祀庫小有  
やまくひ元はく秋寂蓮作

林たるゝ日々やとうぢにまくや  
もくゆやまあくそとて林たるゝ木の木

按小ヤスラと安藤の意東京の曲章にアマトロ唱すの内すたの巻そちふ載集録下也名の歌  
係後頬筋のうちふ「こく」本の巻そくをもたと年次はむともわしとを因よ。お家に  
みくらんを山林の肉とん。とみがせはえくられよあるまでの食とくらふ代ふふ代そく。又はそくを  
なぬの笑せいたり是とふ代する神のよとのみせんそくは二首のすきる記  
中元モミクモチヤンのぐら

山崎雅宮八幡神樂

山城國乙訓郡大山崎村  
奈神八幡





て法華八諫を大宮の寶衣よちあく修<sup>カミ</sup>。凡<sup>アリ</sup>來毎春二月十二日十三日これと  
行<sup>カミ</sup>あつ是を幸禮拜講とす。新禮拜講とすも同月廿四日廿五日十彈  
昨の社前よりてこの神祇行<sup>カミ</sup>是又後蛭川院えにえ年忌祓和焉<sup>トクシムラヒノミツハシマツル</sup>  
本祭より或說云神為瘞の起<sup>カミ</sup>古歟<sup>カミ</sup>の太衆傳<sup>トクシムラヒノミツハシマツル</sup>出家<sup>カミ</sup>の法  
義<sup>モヒ</sup>是宵<sup>カミ</sup>更<sup>カミ</sup>放<sup>カミ</sup>山王大師法<sup>トクシムラヒノミツハシマツル</sup>の裏<sup>カミ</sup>弘歎<sup>カミ</sup>をゆひ<sup>カミ</sup>と去<sup>カミ</sup>て昇<sup>カミ</sup>  
天<sup>カミ</sup>一<sup>カミ</sup>行<sup>カミ</sup>と純室<sup>カミ</sup>向<sup>カミ</sup>上<sup>カミ</sup>山下<sup>カミ</sup>の草木<sup>カミ</sup>忽<sup>カミ</sup>ち茅<sup>カミ</sup>不<sup>カミ</sup>安<sup>カミ</sup>ば天<sup>カミ</sup>大<sup>カミ</sup>不<sup>カミ</sup>私<sup>カミ</sup>と  
三塔<sup>カミ</sup>の詳議<sup>カミ</sup>までお乃<sup>カミ</sup>び俄<sup>カミ</sup>小東塔<sup>カミ</sup>五<sup>カミ</sup>巣<sup>カミ</sup>の衆<sup>カミ</sup>凌高議<sup>カミ</sup>して大宮<sup>カミ</sup>の拜殿<sup>カミ</sup>をも<sup>カミ</sup>と  
法華<sup>カミ</sup>八<sup>カミ</sup>諫<sup>カミ</sup>を修<sup>カミ</sup>行<sup>カミ</sup>。法樂<sup>カミ</sup>とす。神<sup>カミ</sup>龕<sup>カミ</sup>慰<sup>カミ</sup>先<sup>カミ</sup>をも<sup>カミ</sup>其<sup>カミ</sup>後<sup>カミ</sup>二<sup>カミ</sup>塔<sup>カミ</sup>へ觸<sup>カミ</sup>れ<sup>カミ</sup>く集<sup>カミ</sup>  
會<sup>カミ</sup>。又<sup>カミ</sup>八<sup>カミ</sup>諫<sup>カミ</sup>修<sup>カミ</sup>行<sup>カミ</sup>。凡<sup>アリ</sup>度<sup>カミ</sup>あつ始<sup>カミ</sup>先<sup>カミ</sup>東塔<sup>カミ</sup>立<sup>カミ</sup>若<sup>カミ</sup>く修<sup>カミ</sup>行<sup>カミ</sup>をも<sup>カミ</sup>と新禮拜講と云  
諸<sup>カミ</sup>。後<sup>カミ</sup>十<sup>カミ</sup>餘<sup>カミ</sup>作<sup>カミ</sup>の<sup>カミ</sup>お放<sup>カミ</sup>も<sup>カミ</sup>く三<sup>カミ</sup>塔<sup>カミ</sup>の修<sup>カミ</sup>行<sup>カミ</sup>をも<sup>カミ</sup>と新禮拜講と云

今月と較<sup>くわ</sup>徳<sup>トシ</sup>拜<sup>マサニ</sup>達<sup>タマニ</sup>と云廿二日を新<sup>ハタハタ</sup>社<sup>トシ</sup>拜<sup>マサニ</sup>達<sup>タマニ</sup>と云是<sup>シテ</sup>勤<sup>ム</sup>

高寺小法皇の宸廟あつ寺外二十石高ちる御法皇の侍建主トモノノ  
一通トモトモの御通トモトモ内大佛蓮華王院小於く修り之俗よ二十三間堂と法皇本  
序建立御像も堂の東法住院よ於く同席あつは寺初鳥羽院の活潑  
十面觀音の像一千一休を安坐し得報壽院と号ひ後白河院に  
又一千一休を送り是と新千休と云寺を蓮壽王院と改む又除長壽  
院ハキ帝も鳥羽院寺四の皇子諱も雅仁帝母へ侍賢門院大治二年从  
降誕之年ミツトヨ二年御崇二十九年受禪賴長崇徳新院をもとめ保ええ  
新院を白河の御所不遷トモ源為義ハタケイの父平忠正ヒタチマサ清盛シラタケ  
下野守義朝安藝守清盛勅と請く賴義と討く新院を  
讃岐ふ遷き元三年八月御経と守仁院ニ桑不復トモ上天室と号ひ平治  
元年信賴義朝法皇の御所院ニ桑を焼く清盛馳と信賴義朝と亡トモ尔も  
清盛が威海内外衆入法皇或鳥羽の離宮今竹田安樂寺院の地是ちうへ押鼈又福宗不遷  
を義朝が子賴朝法皇の院宣を得て兵を舉卒承法亡に逮之元年二月  
十三日法皇崩トモ年六十七在位僅三年トモ二年六乗六乘高念安德

後鳥羽院まで五代の同院中よりて政勢をひき、  
其家承継る更もは院より始ふ  
法輪寺十三系 下宿總山の林庵也あつ

志喜幸口福氣済虚空蔵菩薩、男女十三衆の者、今日奈作むれ奉祝  
徳智惠を授ゆて都鄙童男女ちひ小群衆近見と十三參と云  
今日商人婦内ふ旅く十三ふの集ふは妻ふ旅人求くこれと申るふ街トテ  
後小児よ食しにひれが脅車、被徳をほとよ是迎年（まつとせう）の支あり十三歳とつよも  
望年（まねん）へうた年（とし）かく三十一年許（ごく）あふけドキモ迎本別（ほんべつ）にて盛（さかり）幸（めぐら）  
虚空菩薩より十三日をりて縁日（えんじつ）とて十三をされふ極（きわ）まのまゝんを  
ひ寺及び邊隣峯（ほう）みの桜花は頃盛（ごうせい）人されば都鄙の緒人太井川のゆうふ  
道遙（とお）きる若多く春色の美謂んとあ

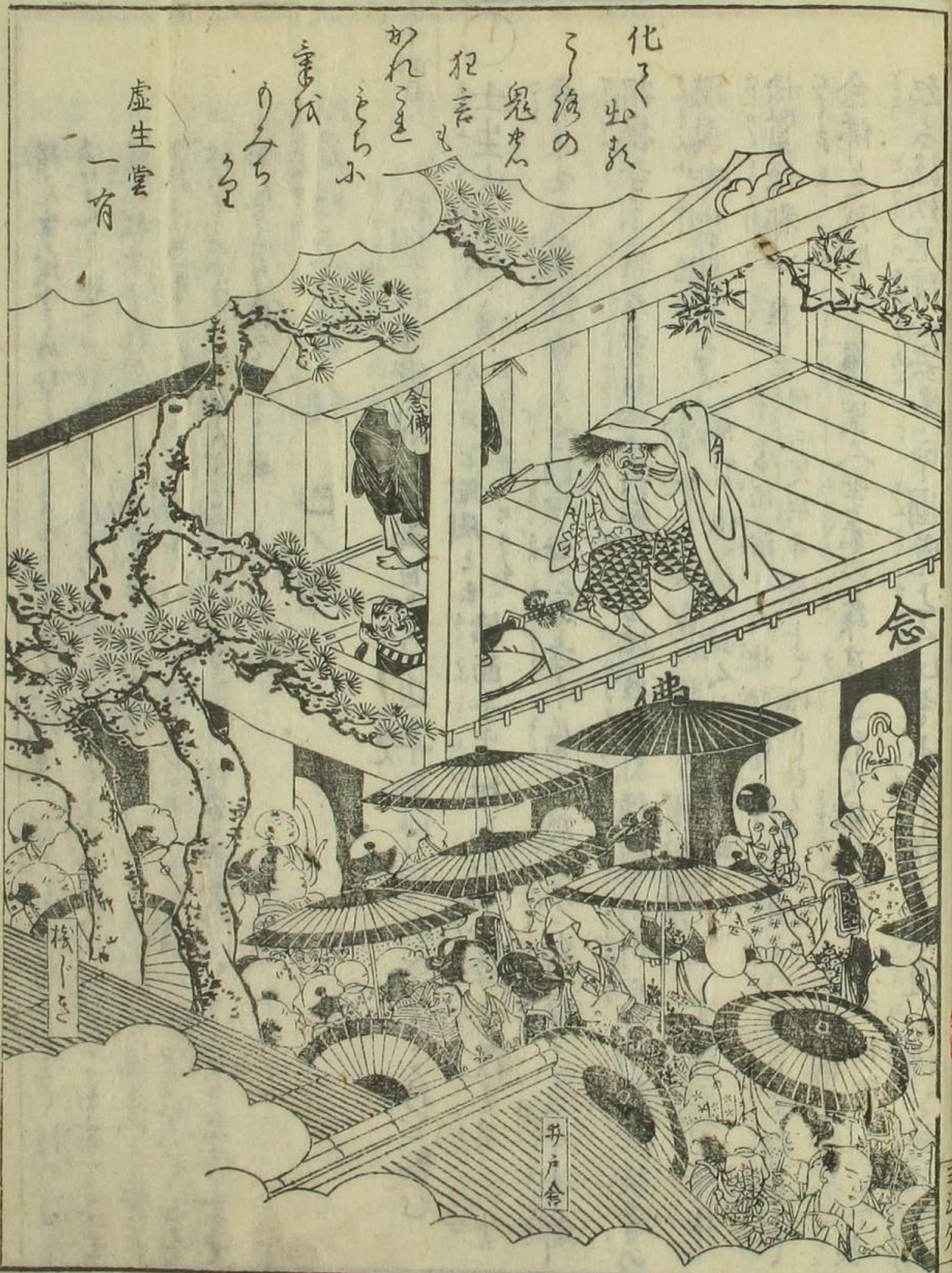
附  
錄

今昔物語云 今古むし一比廢ひり是れ傍あり。學文の壁かべアリ。あつとくともあま  
まうづねよを入いる。はしねうづね法ハセ通スル。ぢうだうをもひひ。さと  
學文のむだムダ。すて。常ルは肺マツキ。虛空スルガ。喜善シヤン。齋セイを有アリ。九月クモウ。そ  
法肺ハマツキ。小指コウジ。疾患キハ。人ヒト。とト。幸カタの傍ハタケ。よまれる。がりうて。物モノ。かうりする。同ドウ。日ヒ。  
うれきに成スル。ゆふ。あの家ハセ。かうして。日ヒ。うねスル。その。あよ。かく。人ヒト。すりぎれ。ば。立タ。うて。幸カタ  
み。家ハセ。金カネ。たゆミ。て。おち。ふ。下ナ。女メ。う。か。く。人ヒト。あ。又アフ。知シ。あ。う。兵ヒサ。う。ざ。ん。そ

女身が身ふゆひくならずあとれ。傍濱念まれど一く辛苦惱乱すと  
うをうか。あれども人のきうんまふ御ふよりと。あそく通じることと解を。女乃  
はうこのつと車と圓へざらもあらば。あれども我支なじ人。年。の春  
失へうげ其ほんあまことするもす。や。させる車ぬれとくふぬと。と  
せひて寡うて居る者。がれほくどおれさん。だくと。ふゆくふまんと  
解。や。こもあらねども法華經をそくよ。みゆや。經をめりとふとく  
よ見せ。びづびきらむと。傍づく。法華經をちひ。うとくとも。まことそち  
にうえど。まぞく。そめくらう。か。幸がれんと。傍いとく。何ううふれふく。見  
と。まづく。すまうふよ。ほく。經がうく。まつてのく。其とくと。車えのでく  
むびきるべ。傍。車を圓。切よろひは。車もやまと。あも。傍。く。に  
成。うぶ。うふ。まし。出られ。現。も物。う。食。う。心。う。意。う。け。ま。一日も。あ  
の經をあがみて。行くあへんと。とけ。ほし。よ。自。た。う。ふ。う。得。う。  
此。内。も。ワ。と。車。あ。れ。と。素。よ。え。を。や。ま。その。道。車。て。に。惟。の。布。干  
般。り。と。舎。は。よ。ま。く。は。う。り。の。縁。これ。を。ほ。や。と。と。と。む。の。中。に  
う。き。く。ゆ。す。半。解。う。び。經。を。う。か。例。が。う。は。福。ふ。清。く。厚。ふ  
け。が。より。な。れ。の。ゆ。う。れ。物。う。と。う。く。や。く。あ。れ。と。れ。ゆ。房。あ。ひ。物。う。じ。て  
衣。を。ぬ。ま。奥。へ。の。傍。も。う。ど。あ。と。て。經。と。よ。そ。う。わ。其。声。き。り。と。て。女。が。そ。ぐ。  
そ。し。ゆ。て。晴。う。ア。ん。と。す。よ。女。衣。と。身。ふ。ゆ。く。と。へ。と。て。我。今。ふ。  
き。く。と。事。う。は。經。も。ま。す。ふ。う。く。ア。ゆ。く。と。へ。と。て。我。今。ふ。  
ち。ん。ほ。う。た。び。よ。去。く。き。く。と。へ。と。て。方。か。ん。と。解。も。う。

どうれん事とも同やさん。すれ更たど同く生きねることせ法師うれ縁もくとゆん  
人と何ともやり合ひとひく法華經の席不うちけトやそ教有て善ぐてたれ不くとゆん  
事。かひるにちうひあるひもわくもう。威もむだ人のひきする事に善れば。まく  
敵よゆすをやんとく成る事。こまにゆくもうゆふも。きくあく聴  
ちひりぐる事たり。志くかくかくくよとよめく。うまがこそ学文と勘  
なれてこそとやりひと物ぐらすうらみ承もとめき。傍ル帳とあそひす。安  
物ぐらしき。傍ゆくは法輪よまう。屏ふくとあそはれまく。おとけて寝  
入ら。就きよく寝入り。かひはる事といふもくもくゆくゆくゆく。目をあてて見ま  
る。女ふくあくで薦乃坐る。公抱きて仰居たり。あゆと思ひて腰をりて坐  
ぎをば。づくもやがくぬ脚中たり。公まゆひ肘まくゆくゆく。身をひくたちて下りて寝  
る。公ゆくゆくゆく。公は腰まくは腰こそそと小あう。おもくたちて下りて寝  
る。梅浦よもよもて桂川をつづりては痛よゑく。法堂に入まく。身よひまくして、づく  
ゆくあうゆく。津にあひう。助をうととゆくとゆく。所も度へまく  
豪小清のうちうれじ。善た小傍のうちうれじ。傍が傍が傍。小井く  
告まく。いもく。海が今夜たゞれう。年も。狹狹の年も。あしられう。あしら  
れうとゆう。海徳教なうとども遊戯う。ゆくはまく。文公せん。おれどもそれ  
をかききて我许よあう。おとはあをとゆく。ゆくやうのまく。我は幸といふ  
をくもとす。安断ふ。女乃く。ふもくじゆく。あれがうれよほまく。智と

自三月十五日  
向至九四日  
洛西壬生寺  
太念佛會  
扮戲の圖



十四日

## ○祇園社法樂能

兩日あつ迎幸

衆

神と勅む

生大会佛會 今日を繩燈と云ふと、洛西壬生村小あり心淨光院と号す。壬生

寺と云又寶幢寺と号す中安二年寺小屬を放小ニ再寺と云今南都

招提寺小属寺竹四十六石卒る地益する稱徳玉室の御宇南都招提寺の

監真和尚の開基と云當寺小監真の像面有基と云

一象院正暦年中

快賀傳都中無と津當地益するハ快賀傳都

念佛乞於傳都母定朝母令と云惟しほと云

念佛乞於傳都母定朝母令と云惟しほと云

起居後伏見院正安年中圓覺上人は寺小住一塔く融通念佛と將死至間

得ん事がすみゆうてもうまるから。汝遂に小車ひりほりとく法の道を  
はかんくねくれ事取れとのくとく差はれども。傍そも虚空慈善  
菩薩の事をさへきんくて。年々女の身と變りてもうまめひしをねりつゝも。やく  
くかくさ車くだまく渡をまぐ。悔しき事あきを後ふよがくわしく心を  
えうま文して。車んごとかれま牛かうに名をあれふやけむを済車せ  
あんごうう傳へざると也。

## ○松尾社太々神樂 己ノ部

衆人の睡と寝んあふ狂言なきんと云て管見記云圓覺と寧樂四服羽那極木廣えが  
子之寺記の大和國服羽那  
父之大鳥氏則つみたりと云  
出家に母を慕ひ法隆ちのをみふ初く靈爰と云う齋治す到立道俗男女を  
勤先去現王の名假と祀一外紙由異相のゆるまひと云一踊躍して念佛  
城を登り拂ふ母よ達不庵一との告ゆりてか半生は即ちてねく云  
念佛の異相と云一経よ群集の中に母ふ達りと云  
大悲佛を一所み用意して云二所と云所潔ふ半身而主坐す  
是形記人のおれ薦所と云上定院と後一乗院の寔仁年中度院  
後伏見院正安年中れりて其間二百  
七十年が遠く終くハ國元へ再興するを。今日うち廿日を約と壹ハ壹  
筋よ旅く俳優と云一毎夜西の引う成の引ふるを金鼓をうねり大  
念佛を修し教くば狂言の外他虫の体をさへあつて袖中桶とうげ足  
掛かるの持字とばく其條の狂言の持字も祕夏ありと云是不傳遊戲三昧  
行して狂云即念佛と同体なり故不見圓の事も其利益等一を之縁起意  
其式十四日狂禮と號て俳優様の波打不の繩を華蓋ふかくもゆき  
面棒またと長間行小紅白の紙を巻く車あり且と面旗として狂云

十五日

## ○本國寺立像釋迦開帳

建仁年中伊豆國伊東の海底より漁

父の網小罠にて出現の靈佛より目蓮上人傳來の配不詳て得少く

漁

捨芥抄云二月十五日祇園一切經會三、四社より山門小屬  
に上りて敵山より此會成被行あり——

○西大寺道成會 今世—— 延喜式日三月十五日西大寺道成

會云云

西大寺のやうに柳とトウゲ  
古今ある縁ゆゑとさうをもくとも爲と玉ももぬける事の柳う

僧正遍昭  
殷富門院  
大補

支本 けうともせよ西大寺主むじがそれの縁ゆゑとしと

○梅若忌

武益下総の界隅田川の渡小祠あり山王樟観と云

柔神

○梅若丸の靈之寺を本母寺と傳云昔若田中將惟房卿の男七歳乃  
時父小難を悲傷の傍り生家せん半休於ひ比處山月林寺入て修學に十  
二家の附野人のお小勾引にて東海の諸よ都く途半にて病ふひを終不  
は前して早世し于時貞元元年三月十八日偶患圓阿彌藥爰小木立梅  
君のお冥福を薦免業の念佛と源氏云れども今より大念佛會あり  
遺辭未うりと據て萬葉折を載せ冷朝社歌小布紙の懸と三神供  
御人并に

○中山寺無縁經 今日うせ一日と七ヶ日の間修之 摂津國河邊教有  
本尊觀世音菩薩西國巡禮弔廿四番と云

○懇持寺無縁經 今日うせ一日みゆ 日五鴻下那ふあり本尊觀世音  
化人の地宇多帝寛平二年越前守藤原高房卿の手創り——

西國巡礼弔廿四番と云

○比良祭 近に玉藻賀郡小比良村の祐守蛭梅天神南北比良村乃  
頃守山王十禪師の名をして神樂二基波御あり又南小松村の祐守八  
幡北小松村の頃守十禪師天神西村三庭の神樂二基波御ありこれらをモヤ  
比良祭と云ふ也古山門竹す

○巖島會 安藝國佑伯形ふあり富島と云

夏六月  
事トあ紀

○行園忌 寺町革堂行願寺坐て修行に論義あり

○十日

○行園忌

寺町革堂行願寺坐て修行に論義あり

大坂  
原師

十八日

元政忌辰別深州陽光寺よりこれを執行し立桶改

今日大坂油商人新造の油桶油尺を改む

初圖上人常に華の衣を着て故世人  
華上人と云あひ行冬建立うる後小華堂と云  
立桶改

元政忌辰別深州陽光寺よりこれを執行し

元政忌辰作の人姓ひ藤原石井道種が子え和九二月廿三日奉する小字と  
後と云岐嶽聰明書通の假ふよ異なり六家初て書と復定元秀才分そ  
武を号す十二家にて彦松彦少はよ十九家病とりつゝ仕を辞し家列  
和氣の道場と目蓮上人の像はお一三の願を盡し一日我必出家せん  
二日父母の家長して我孝順を竭ん三日法華の三大部摩訶止觀と圓人  
度安元年利髮はくま二十六法名と日政字ひ元政又素嘗妙不可思  
議と云明暦元年の秋幽寺伏劔して居伏トニ事小法衣と脱せば又双觀  
小奉て至孝あり内和れ學れ熟一和漢の史譜も通ド風雅の道と得  
たり寛文八年三月十八日逝し年四十六

清草祭 金龍山清州寺禪守のむらり

五印已赤西支の年小額

神社考云昔宮戸河内に兄弟二人の漁父あり名父捨然深成竹  
成と云推古天皇三十六年二月十八日の船天霧くるふニ子宮戸河子細文入  
魚成ゆきて多ら親喜の像成ゆて二子又細文秀へ七浦と達焉ゆみふ  
親喜の像成ゆる三子又小號をねて小嘗と建くこれと安否に三年平

して後子孫二社を建て三神と今之三所の護法是りうと云  
其式示日三社の神龕と卒堂小屋一堂布よ被ゆ田樂あつ是と信  
ひんぢらとてひがい田樂に用ひるの多は日氏の町く遡物揚まへ卒堂  
ひび三社の神龕小屋に蓋付日氏の町く遡物揚まへ卒堂  
移りゆけたる後羅織補を拂ひ先清州遷御の御小集り是より次第と  
清州門の外そ神龕を承ひ拂ひ清州門と僧のぼりて一様  
祀へ神龕拂あげず今日神龕のあい品川駅の西大森村の漁人  
より如に是御前宮戸河邊小住せ漁人後世太森又後ふゆゆ  
いふへをあれどるの激喜り神龕を置く陸地を舟社へ豈しとする  
今日市中小旅く糞拂夷都多くをほの太民され祓署ノ故小糞市  
とくに國画も

二編小如人

淨光寺觀音懺法 摂津國河辺郡ふあり

諸國

○大龍寺觀音會

同國矢田郡に所在

○人磨供

徹書記物語云二月十八日为人丸忌日而首當和歌所

予每月十八日哥會有一也人丸之日人官家小濟新供と仰せられ  
今も和守休好人多くは今日焉の爲あり 橋慶圓明石大念若小祠あり

續本朝文粹曰藤原敦光作人磨画讚云太夫姓村本名人麻呂蓋上世之歌  
人也仕持統文武之聖朝遇新田高市之王子吉野山之春風  
從仙駕而獻壽明石之浦之秋霧思扁舟而綴詞誠是六義之  
秀逸万代之美談者歟方今依重幽玄之古篇聊傳後素之新  
様因有所感乃作讚焉其辭曰倭哥之仙受性于天其才卓尔  
厥錚森然三十一字詞花露鮮四百餘歲來葉風傳斯道宗匠  
我朝前賢涅而不繙鑽之彌堅鳳毛少彙麟角猶專既謂獨步  
誰敢比肩云 人丸經焉之地名石見圓滿角山止り今神祠ありは素  
紀中絕して御教體の義あ 靈元帝勅ありて再興一絆正一位を授

○人丸辭世の詠

石見深たるねのねの本丸うちうんをの月を見てもやうかな

人丸

荒鳥安崇雅卿云人丸と持統文武の二代が出現して元明元正は二代す  
聖武の御宇にすかう人丸立帝にはすうちともち天武の御宇朱雀え年に  
出生一聖武の御時神龜四年三月十八日卒に立帝は間に十二年の人丸  
四十二年を立 神社考云天平元年八月  
或書云白河院清治天平栗園太臣の孫中納言兼隆の子讚岐守兼房と  
是人卒本和守小山と入奇以謫ゆひ小秀祐もすりなれを人丸と称すあり  
一此或次云夏小比叡の山西坂下とやほりさく又以爲ひ一子孫の本らあくて  
梅の花をうつ開きうつひ波よめどこまふ見ゆ一而よ年たけする老人本良  
に應ふの指實小榜と云ひてある鳥帽を乃ちうてよく常せし人馬を以て左  
の手小紙を持右の手小筆は潔をと見るの本事ドナムシテ左筆房あり  
くて併人まと向び年本人丸をむよまはるかと志能をすりて夕と申す

且てやま手すにうむとこそて爰よりて終節と祐じ爰よりてやくせ

ゆひ 小舟く御ぞむく書一め故似するが御御く御く御く御く  
寺よりや生くも放の通をとあわて死後にはは本伏自河院をと  
詔ノ院候ひきくも洞の寶在よ納りへと六集を支那集御ゆく中

は本と書写し敷光の讚と修へまえ本大店御房御の息神紙伯承仲清

書せを終へ其讚也

梅乃死それとも見てゆことの跡すなふ雪れきくらまく

し次を終へ書くと

按するに兼房爰中の儀は御事師画人信重小室アヤハト亡兼房も  
信重も白河院の時の人なりつゝへり人唐の像と盡小品くの神あり  
明石の人丸里の海士乃人丸とて其品うまく古今著聞集に兼房信

重を爰中に描いて画ふに變更一とあり信重へ土拂門院正治

年中の人太佐家の祖

人唐の像も和列材牛寺布留の妻アヤハト母アヤハト夫

妙光あ中人に人丸堂あり本儀は後御の御入社して又周邊園小社あり

戴恩記云龜井豊州因幡へちりり志く入社し降宿の時佛よりと我

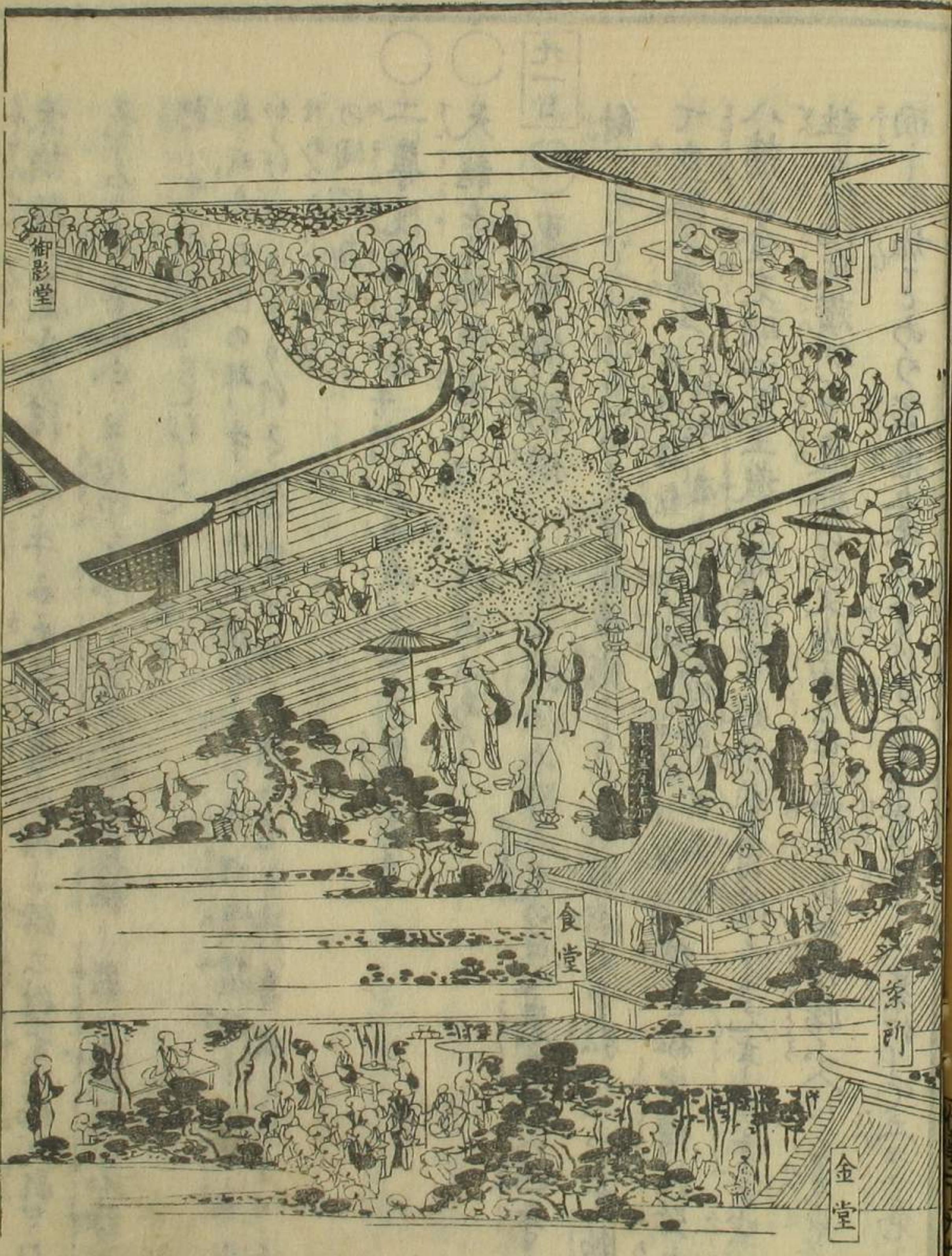
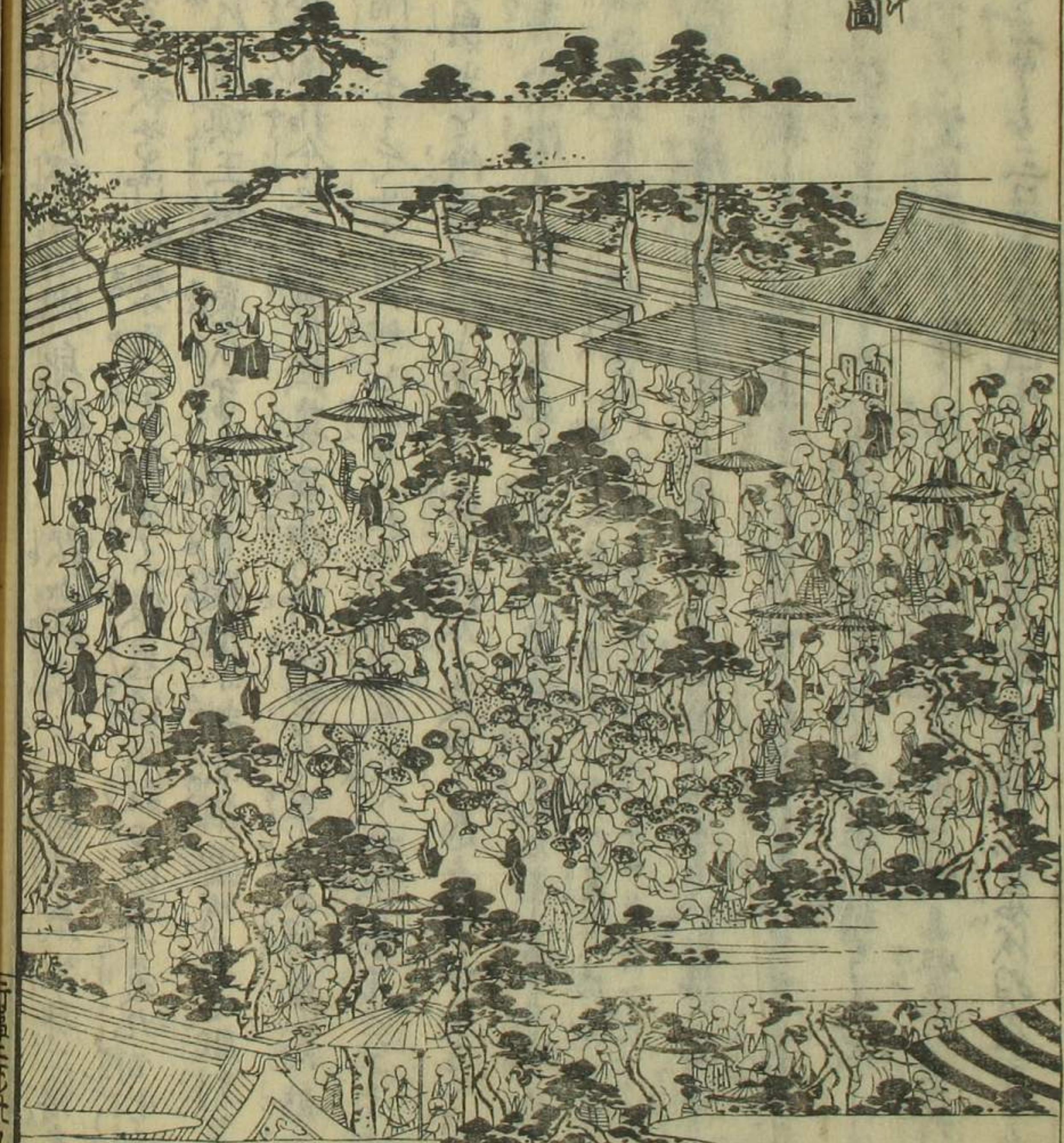
内小人丸の社あり内陣と見共女侍にておへすると云又吉田の神龍

院の湯いと宇治の明神と人丸とおくりと云戴恩記は矢張の修

尊客より歎迦母摩耶丈人の爲小報恩經伏詔ひて一夏九旬初利  
天より座に優曇王佛と慕ひまく毘首羯磨小號赤栴檀拂りて厭刻せ  
せ是と被國諸全に安置に歎尊安居の淨法ちり奉土小歸りて時彼本  
像序階を歩みて生身の佛と迎ひ歎迦本像小寫く我涅槃遠れぬか  
未本の衆生と浹度有りて共よおて君全よ入ぬよ壽寺の寺を是より  
支う唐土小源く宋の代もゆく奉朝一寺院永延元年東大寺の衆  
往法橋齋然日辛に將來ひ又行只の裏より辛村傳本の年月と記さる  
濟身拭の起と瑞像記立當寺建立の日奉授の時奉す告終よ海が母  
羅拂して地獄小へりと真宗の志伏りはく精重行丈して高生通小生  
驚き空く望日西門より御坐ひ牛と乞得く堂の側小般坐化齋丈と  
毛の書う二月十九日牛死とより葬衣と潤入如赤絨ぬひを來

三月廿一日  
東寺

御影供の圖



赤捕檜の葉をうはて牛糞若毛火幕に附よ津古御守の瑞氣瓶也  
是より年毎に今日向巾を以て日本のお香が持衆生煩惱の不淨と  
持して清淨うじむとへ已上取要

其式今日己の卦辛未の戸帳を解れ寺塔等覆面にて法衣を  
かげ白巾とり御子を詔書代拂ひ拂ひ是と拂身紙と云今日も  
せのうまで一七日

の同室扇あり

○二尊院西山忌手引上宿識小倉山の隠山あり

○天龍寺施餓鬼已引下宿識あり

廿一日 ○ 東寺御影供

今日弘法大師入定の日へ東寺と西寺

對して又け北うちへ東鷗臚館ありて伏宿識天皇弘仁十ニ年勅  
て空海小賜へ西傳達鉢と字敏小賜へて西寺と傳達鉢を祕密傳法弥勒  
八幡山金光明四天王教王護國寺總持普賢院と云元亨秋書云空海  
姓吉佐伯氏讚州多度郡の人父吉田公母吉阿刀氏梵僧懷少入はしも爰見  
而して姫とあり宝龕立年に生て小名も貴物十八朱引て大學寮に入

儒學すよとよも志佛教小引て油門勤擇よ遂く求聞持の法と安せ承  
りて剃髪を初名を教海後よ如空と云延暦十四年東大寺戒檜小登  
奥足戒を受空海と没む日二十三年遣唐使光祿寺支藤賀祐小徒川  
渤海小部と青龍寺の慧果阿闍梨に謁と果見て喜び因秋生空海乃  
本る夏を幼くお侍奉之と兩後の二法祕密印信を授く大同元年に  
帰朝一周く密教を弘め生涯神変奇特の事あり書を日本立筆の其一  
き弘仁七年紀列坐遊く勝彼と相く高仰とよ上り金剛峯寺と創む  
十四年勅て東寺と海小芻の承和二年高野山ふ生て毘盧の印と結ぶ  
入定ひ延喜廿一年十月弘法大師と謚を賜ふ

今大師の像と安する堂と西院殿と云是後宇多院の寢殿と康僧  
元年十二月廿日同福日二年古制のち造立あり被ふ佛殿の造小  
あうだ傳達鉢の半河海舟云延脣延筋の始東通の大丈よこれを  
置る弘に帝東傳達鉢の地をり御子西寺と云傳達鉢の造小  
西傳達鉢の地をり御子西寺と云傳達鉢の造小  
小傳達鉢を建く三韓の傳舍と其中小屋くさくあらうとれたへ弘法  
守故よ拂ふ傳達鉢を云延喜延歎の時  
室ふ地にてと傳全あざる夏月也

今世弘法大師の御影供と像と傳する所ありとぞ。東寺と云て才一え  
る大作の像開龕あり。京洛近辺の寺院別院と云ひ其舍場。又  
おゆく放下作奉。今日も膳と形。茶湯をあし。宴席は井あり。高人僧人百姓と  
今日も膳と形。茶湯をあし。宴席は井あり。高人僧人百姓と  
周云。今日境内灌頂院の門と。安久。宴席は井あり。神殿花の神  
龕地不通り。上より馬と。画馬をかく。是毎年正月元日より  
上の不と云。里俗云。其馬の赤色と相りて。鷹先共年。風雨とトれと  
死後。多謝。其年。死後。君墓。姿うれば其年。必風雨あり。と云  
御室諸。洛西仁和寺より。玄を御室と。古宇多天皇御坐處  
の後延喜元年。御室城は故不建。をゆふ代。御法勢。と。門跡と称。○  
の更にけす。よ。好ふ。  
○ 小一毫の遠ひ。かく放下作の像と云。  
○ 高雄山女人。請。當寺と祕密真言の道場。やて。はゆに。女。乃。系。宿  
夢。に。今日。一日。こ。れ。を。待。て。消。む。  
○ 雲林院菩提講。洛中光明院。小弘法寺。中光明院。小弘法  
仁明帝の皇子常康親王。かくと。佛刹。と。雲林院。と。号。し。御父帝。登  
遐の後。追極のね。毎年。御忌日。小法華。金光明の三經。と。灌頂。と。法筵。と。傳。せ。し。方  
是と。菩提講と。号。し。は。法。中。絶。あり。と。後。弘法帝の詔。不。かく。大德寺。開山。大灯和尚。  
住吉互の御新園廊。○ 二年復正覺院。御新供。弘法大師四十二歲の像。自作。  
○ 永代寺山開。御川。富。實。是。八。懷。の。別。當。大。乘。山。と。号。し。  
園中。に。接。拂。し。声。一。庭。の。門。を。安。く。活。人。本。見。そ。し。又。辛。秋。の。像。小。德。中  
大。坂。能。人。墨。女。桂。世。六。辛。の。櫻。あり。世。よ。放。伝。極。と。云。今。僅。小。殘。る。  
○ 十輪院。御新供。和州南都元興寺の邊。菟急川の。あ。よ。ら。弘法大師の

三月廿日  
雲林院  
菩提講立圖

名寄

されやまく

雪れ林のむ  
ちくいん

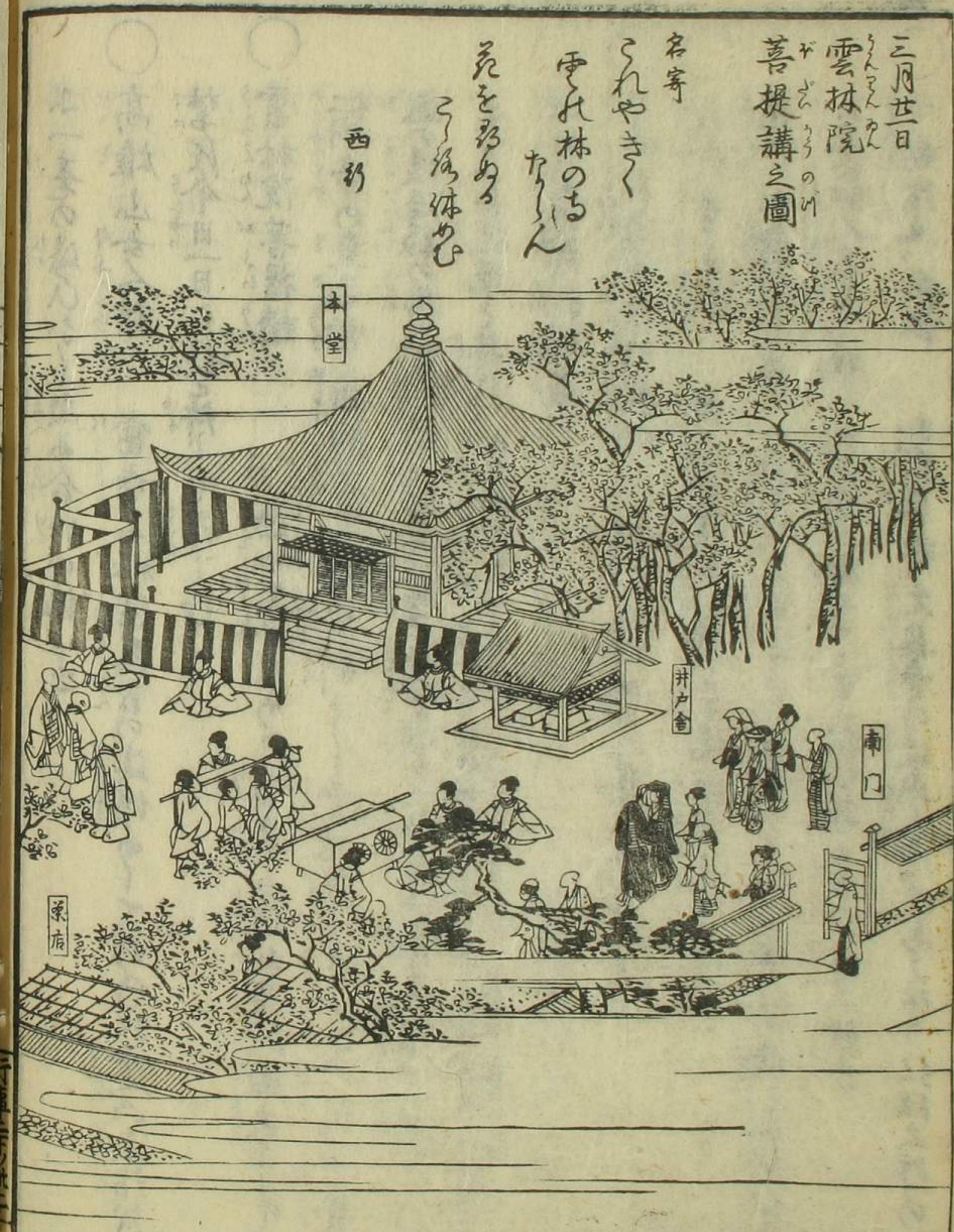
花を祝ひる  
こうほ体をひ

西引

本堂

南門

井戸金



岡墓石の佛塚小石地壇をほこうこめたり

○高野山佈教供

其原三船及び法主の寺院も存く今日大師の像を

岡廟へ法筵を設す

○松前義経祭

義経姓源左馬頭義朝の子母と常盤小字牛若丸父義朝討死の後鞍馬山に登て東光坊より瀬小奥より下は足穂朝兵を石橋山より奉れ附駆て是より加々義仲と栗浦小討平家を滅ぼす亡にみり義経の功より檢非違使判官より仕せし証言を委く兄頼翁の不興承あり

奥列高鉢小多江後松前より渡る國民崇く王と神より祀るて義経明神

と号すと云ふ事據ある云記

金史列將傳云

範車國大將軍源光祿者日東陸華山權冠者  
義行太子也始入新鞚部為千戸邦判事身長  
六尺七寸性溫和而勇猛才思甲諸部一外夷多  
隨中畧昔權冠者東小洋藩君章宗額厚賞  
定總軍曹事官令入北鑛不日破蘇敵得印等  
醜來屬幕下築範車護焉頃侵北天渡龍海得  
島小河麗奇而悉金玉也民知煎靈少食  
定云云云云云云云云云云云云云云云云  
敬得長壽後遊中華隱見更不定云云云云  
義經後小改名一則之義行と謂之云松前渡海の度卒終の因記又所見  
よくこれと諱ぞ義行と謂ひと云松前渡海の度卒終の因記又所見  
かと之も右金史の説不捨て松前より異國へ渡られし事著  
金の卒終を女直又女直と云ふ又一説小寛保三年奥列金津城田村  
熱平と乙者故ありと家残落川附累祖より其家の棟本に結びし所也  
あり是と下り見る所上と參重小も見え若きり對と切毎にこれば  
其牛に一書あり其文云  
は度か故に渡以為根木栗七斗後備用以於歸來堂之考其時之  
將軍可頃裁所者也

文治元年申八月十八日

會津油田百姓

熱平

伊豫守源義経判  
榮者龜井六郎

按ざる小高鉢の假落川文治五年乙酉より是より卷御等が及公と  
此より既に本渡海の際有りと云ふすが義経の渡海の事より  
して義経明神と云ふ  
義経の靈を祀る所也

○二之瀬祭 守谷明神の事にて祭神惟喬親王と云  
大原指丹波國桑田郡あり祭神守谷諸事 保昇冊

天照太神

春秋の祭祀より遠近の諸人群集あり

其衆儀の食體と以て更に祓はせよ世ふ醴糸と云里俗書蚕の神と  
て近御書萬家より諸と結んと遊む者多し而社より小石を  
出石と云吉桑の蚕是と傳て蚕架に安ば最近はいとく  
因云尚社小祠と指し云伊勢ノ海ノ代參宮と云然極も傳と傳野  
桑と云面士并向山又移るを以上或古種定と云元日神社小祠と云  
名勝より神社より御子代奉誠と云毎度其社小祠を奉宿と云  
月晦日と月未と云毎日祭と云

東御する故日祭と云

○天王寺今宮の神拜キ外供僧今宮小治神拜舞乐あり

○日吉新禮拜講 今始日 本ハ十二日の事下に記

廿五日

○蓮如忌

山科沛坊又や百井又於てこれと勅也

○上人の本願寺八代の門主父と存如上人母と觀音の化現と云小字の布袋  
丸應永二十二年北妻生後後幸亭と号し永亨三年青蓮院と刹  
髮立年十七至中納云と云法名成蓮如と号し應仁二年其子順如  
上人小卒於寺伏附屬一文明九年山科の沛坊と建立し同十五年順如  
上人逝ニ是より蓮如上人再誕一延徳元年其子寔を如へ附屬し

○明應五年卒歿其狀大坂石と云彼既不經一代の法縕舉て教説を  
法語の文章と仰てつ曉の傍傍狀ももく小於く渴仰の信者多く進  
直宗不自晦隠を明應八年二月廿六日山科野村の沛坊移く逝り終年  
般若寺文殊會 南都般若高所より聖武天皇の沛美創勅書の大  
般若經を納む放ま般若寺と云開基觀賢傍志辛巳と丈六の文殊菩薩

寺外二十石南寺又大屋堂沛身と云也  
ウヘイ 大般若經并樹木今於育て計室也  
流傳なりと云之

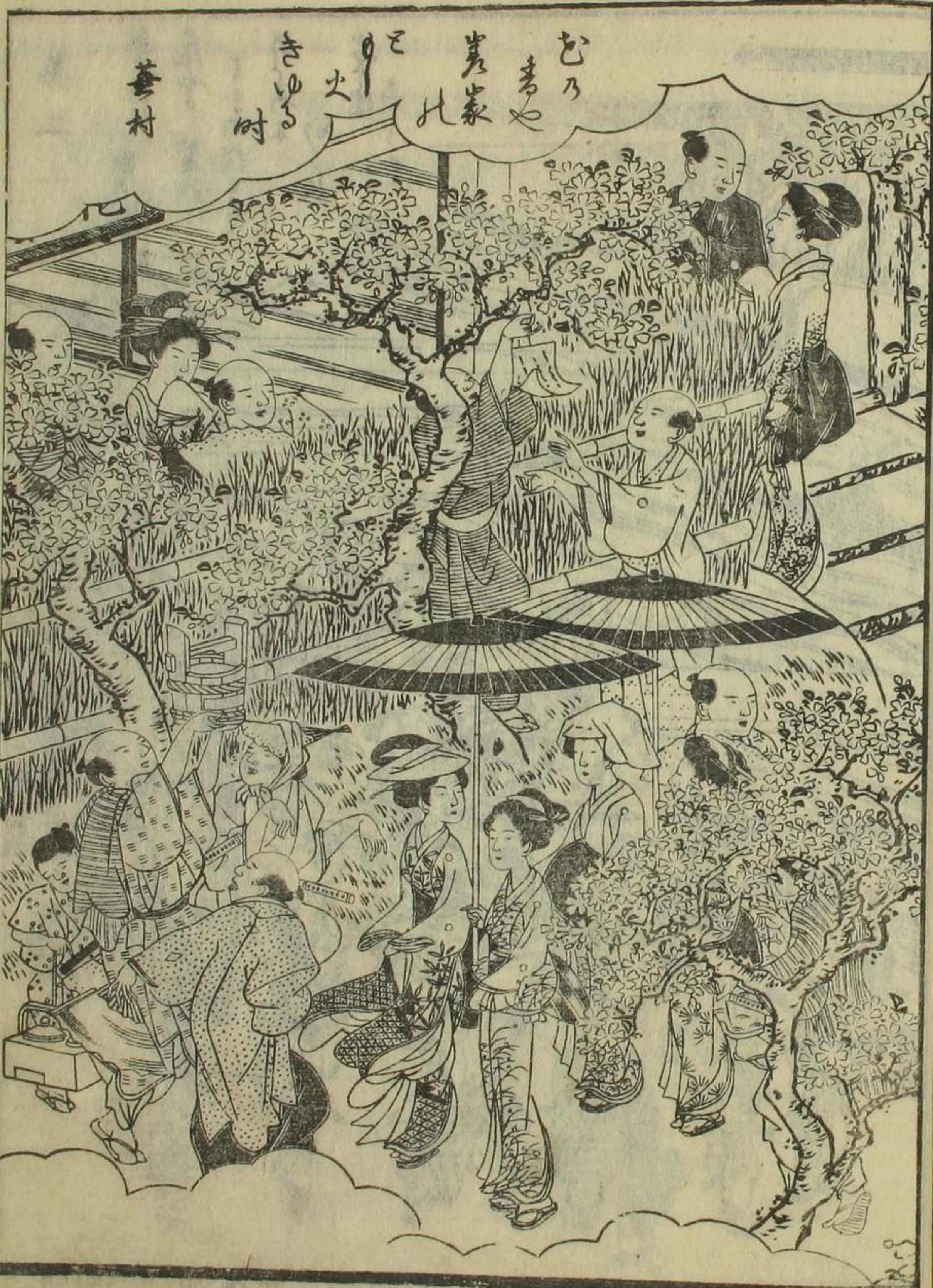
○興福寺中院屋文殊會 中院屋と寺中より

○先帝會 長門國赤間阿孫院寺小安德帝の祠あり帝諱言仁  
逝世南都中院屋家先生連衡の文を一二字表つらう其分つ下の題  
と云て大院馬を寄合書を以て先其字七歳小弟と仰て名書者  
の姓名と祀し今日其子承と引連承経ノ此年宝林小御不の経馬と下  
今年新小せし経馬と掛軒して毎年経馬とぞ更名上達を被る子  
孫と勅也一報と云是近世の  
流傳なりと云之

賞花圖

嵐嶠

花

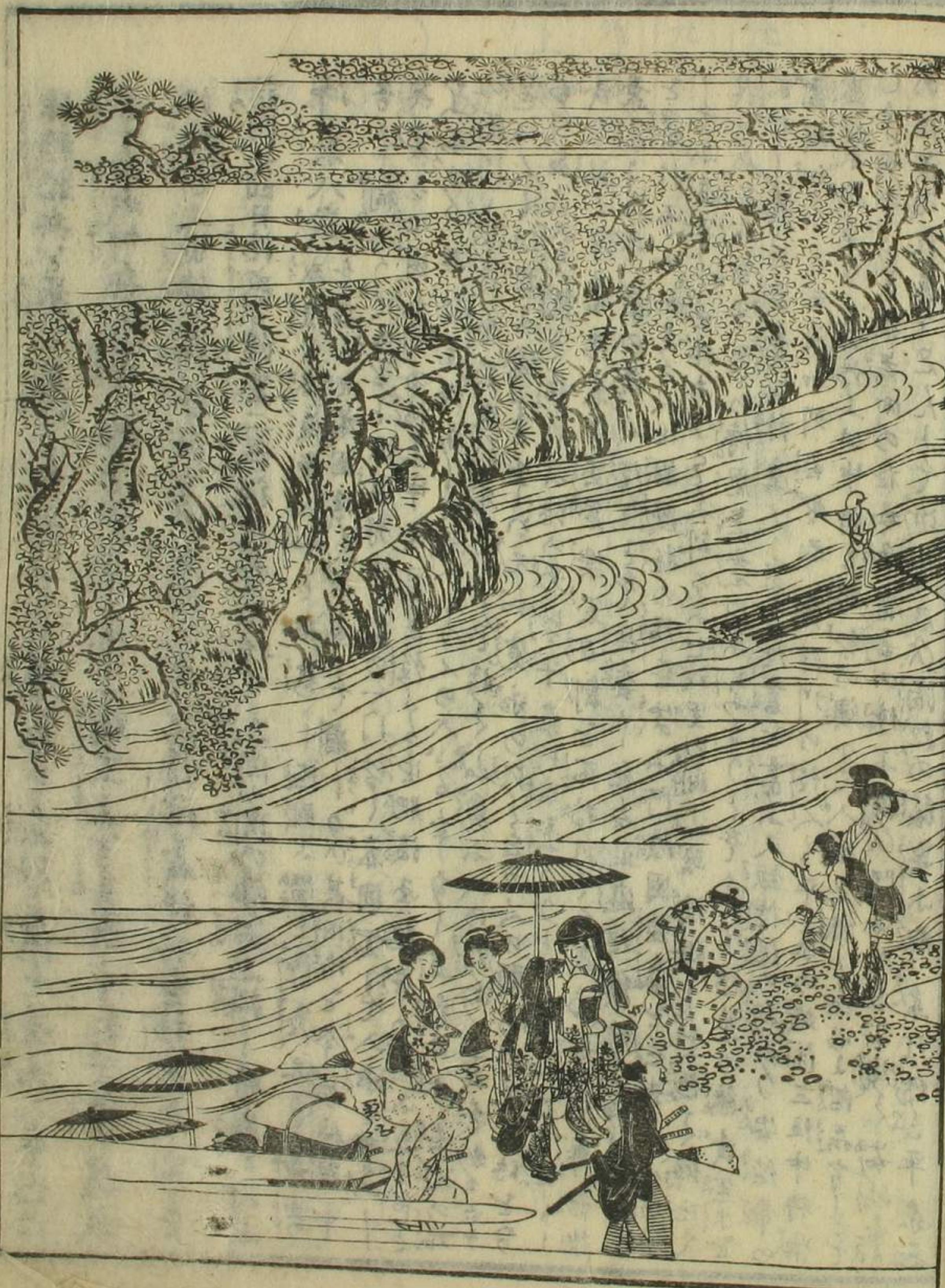


其二

續千畫

談天門院

嵐やすり舞  
さくの梢まで  
りゆく  
幸法  
ちづる



源賴翁兵と奉て東國より歸り十二月俄に都を還り復を奏す二年六月  
 本名義仲兵成奉て都を攻む平氏の一族主上と主獲し都を落して後至  
 に赴き入西海より行幸が爲ん文治元年三月源義經兵を勧毛平家を  
 封門廿四日清盛後室二位孫尾帝城抱て赤間が園の海庭を渡り帝崩れ  
 徵家八歳故既云安徳帝へ對と披露ノ西國下階を御居たる長髮  
 其實もに國九列の極山中不匿と住する由肥後玉無車の邊小五ヶ邑と  
 いふ不あり其地金僻かれて古一里人の入る事あり且利の未を園の始  
 務頃川上より食匂流れあるみを始く山奥ふ人の宿める處を幼立テ其地と  
 は武を勵と平家侍本の室樂器刀劍と不持と云其も那須并若松  
 葉山も平家の彦人往りとぞ其妻も平家也赤髮うりとて都小刀と常  
 と墨に予がある人に因漫社の活を嘗み阿波國徳高と去事十餘里ふ  
 して小屋平と云者ありと云ふ刻より七八里的間山砦喰組にて極く僻地と  
 其地も人民皆平家の侍鬼玉童の末裔ありとせ今も傳來の旗武家と  
 不持し常に武藝と練磨し家よ経書と高ぶ又歎詮況の祠あり安徳帝の  
 霊代形と云又和列御聖郡戸は川の傍人も平家の嫡流三位中將惟  
 盛の末裔ありと云作はれ中將も那須の裏にてへ水と称しは西よ深原有とぞ  
 ○今明日ノシ雲稻荷神の在女若宮女の仲小林阿波院ちよちよ安徳帝の  
 の祀と稱れ是と見んとて近郷多び泊松の蘿寄木碑氣化傳記云平家

○順入峯 大峯へ詣り入峯と云喜と以ての入峯と云秋と達の入  
 峯と云はせち般舟老入峯北跡をもてひ年毎ニ鷲巣大峯高体み  
 入是を順の入峯と云甚段々金すふと蛇樋と通所妨ぐされふよて入峯  
 年々總も醍醐寺の開山聖寶寺仰自ら斧頭をもて大峯又入破範とす  
 ふ転渾び山を開て慈母よ出され城達の入峯と云今も洞門へ入る事多  
 と達山と云はゆきの入峯の奉山方これと勅じ聖護院御つまこと成

檢校・修業三井の長吏坊峯を傍ふ其姫  
達の入峯山方三寶院御の主これと申りて御是天台真言高源寺也  
天下安全の祈禱を終りて御ふあるうとぞ  
按 はふ帆達の名義とて達兩極共よ一乘菩提の峯に入ると云ふ心を表せしゆきるん  
是と後ふ登山の意也帆達の義とせんち其意かしく感ふ仰う候甚矣  
れりへる佛嶽桂進とて大峯不織る人も千日別處身荒足樹を潔祓して  
持ててゆる所也枕巻紙云

又云  
「へる拂嶽持進」とて  
大峯山宿泊するより千日別處  
往く所也枕糸紙云

あつまれぬあどづくらわすあう。ひまドき人をどさん  
やまゆてまくらんやすひやう。まくばるがどの所くまぬ。うあんと  
ほしもまぶはく。うふやうではたるあくつとめでてけき。お  
がじのうぬあくびすくとくられ。あをいとくとくあられば。  
こよあくやほきてまくらとくらへてふ。信質のぶのまけ。信質のぶを  
あぢれあまくすやなう。たゞきよだ夜をきてせうどん。うだうみ。

信受天の出生して詔へ奉り其世の人あ中思ふより書ふが  
今世のせつて田金もあらずに京に別居ふ。七日の  
持をひいて詔を用ひて初く登山の若ち深夜と遅く是と新宿とも二度  
俗人の半みにて山伏も支へ比徳夜と衣服を着け  
七日比持を承宥し二日或も生立の前一日持を訴離して後ふもモ  
猶毛色く繁希とゆく信を凝れ所ひかく今世の世よ神佛の  
靈験を其徳の裏ゆよあらずに信者の裏ゆきものたり

山門様川記云惠公僧都の高弟定覺上人後一條院停宇寛仁年中法界

一  
四生のあがく音札名号太念佛を二ヶ所よ開敷を  
千葉宿  
壬生  
の二ヶ所  
ちう  
一旦中絶

野守境云惠公先德廿五ニ時をば始免乃れ  
蓮臺寺の定光上人是故

うそて又引ひると  
一説云平年の毘沙門天二月中向理繁金背引  
十五年正月十五日

八日後小ま  
帝ひ小み義備公の本所へ移幸の事  
あと一時當ちト上  
賢

使シテてル年ヨリ其スの盛ミツ小コトハ佛ボクを執ハサウてシテ上アマツ勤ムカシ有リ列リ狼ヤマハ木キ  
五十石ゴトクを揚ハサウとシテ  
其式シタチ毎エニ年イニ堂前ドモの普賢ブジ龕カニ櫻シラカシ開ハシメるを期シテて寺傍シテ一枝イチヂクを折ハサウく  
是シテを京カイ祀ヒサギ尹ミナミ小コトハ歎ハシメふ即ハシメ井イ二石ニトモ立斗タケと獨ハシメよそと七セヶ日ヒ法ハシメ入ルの時ハシメと  
其シテ名ハシメ假面ハシメ能ハシメ優ハシメをあへ其シテ技士ハシメ生ハシメ念佛ハシメ隱ハシメ念ハシメ佛ハシメの粉ハシメ威ハシメ小ハシメ等ハシメ  
言ハシメひて手ハシメ技ハシメを取ハシメ其シテ慾ハシメを知ハシメむ也ハシメ寺ハシメの言ハシメを變ハシメりて生ハシメ寺ハシメの形ハシメ  
今ハシメ十ハシメ日ハシメの間ハシメこれと勤ハシメむ堂ハシメあハシメの被ハシメ衣ハシメ菩薩ハシメ龕ハシメと名ハシメばくハシメうハシメ中ハシメよ一華ハシメ卷ハシメすハシメ能ハシメ出ハシメ其シテアラモハシメ雪ハシメ笠ハシメ  
菩薩ハシメの形ハシメは自ハシメ翁ハシメの鼻ハシメ也ハシメ故ハシメ云ハシメ尔ハシメと又ハシメ云ハシメ爾ハシメ金ハシメの菩ハシメ賢ハシメ堂ハシメ小ハシメ櫻ハシメ  
あるが故ハシメよ秀質ハシメきハシメとも云ハシメとぞ同ハシメ記ハシメ也ハシメ宣閑卿ハシメ記ハシメ云ハシメ文龜ハシメ二  
年ハシメ三月九日ハシメ千辛善佛ハシメ不諸ハシメれ昇ハシメ菩ハシメ堂ハシメ之ハシメ題ハシメ古ハシメ人の微舍ハシメの送關ハシメすハシメて其シテ釋迦前ハシメ山寺ハシメ圓覺堂ハシメの形ハシメ亦ハシメよ故ハシメふハシメ

とおびきあひの上に首を捕まふれを獄門ふりあと云々や  
大慈佛も刑人追締のあいは修竹にて  
吉野會式  
大和國若狭山勝手明神  
轍地文殊菩薩  
大利國若狭山勝手明神  
愛愛麁命  
寺說云陽神

子守明神 寺說云陰神  
幸地地藏菩薩 両社の事ある  
者水院寺說云三月令式も子守勝手両の神の神輿を吉水院乃

幸堂へ如く三月吉日社の宝前より旅て仁王余禮が法事で幸  
神輿還幸又云三月花の頃をもぐて花式と云古來より云佛子の  
幸あづま山中仍幸不日教もあく花式と云すてよく前の方の花見の

○ 上野の  
○ 清州  
○ 四ヶ  
○ 沖駿

（ 安樂の子孫  
） 未だ未熟  
（ しめうけふねの名前  
） 異ニ

宋の果樹の枝と手に在る春みて柿てはる  
市中此見毫これと不直ひ狂を退ひ名  
やうん是と揚ぐ奴え楊人と謂ふ長  
教下兜妻の御くとて安古の牛乳がふ  
御下兜妻の御くとて安古の牛乳がふ

写  
ひと威犯  
古今世事  
實も幸ぞ

藤

○ 京安井

○ 大坂地圖

○ 泉列金光寺

ほじ

○ 京上加茂

○ 泉列ほじの尾

山岐

○ 宇治真聖寺

○ 山城安出の玉川

此等新名の名もあれ所まゝ一ヶ月も放くと事とも元氣爆鳴とうて

芳一色路人遊客の疊歎坐もひふべくお形

諸國年中行事太成卷二之下

